小山市文化財調査報告書第20集

宮内東遺跡発掘調査報告書

——第 2 次 調 査——

1 9 8 7

栃木県小山市教育委員会

序

当市は交通の要衝の地であり，北関東の中核都市として益々の発展が期待されています。近年，民間開発による宅地造成が著しく増加し,それに伴う埋蔵文化財の破壊が進んでいます。特に遺跡地は思川東岸の台地上に多く分布しており，現状は畑地や雑木林となっており，そのため住宅建設に良い条件を備えていることも埋蔵文化財の破壊に拍車をかけているところです。

このように開発による貴重な文化遺産である埋蔵文化財の消滅が避けられない状況であるため，文化財保護の立場から発掘調査を実施しています。

ここに報告する宮内東遺跡は，昭和52年度に実施した遺跡分布調査（小山市文化財調査報告書第４集）によると縄文時代から中世にいたるまでの遺物を採集した複合遺跡であり，今回の工場建設にあたり記録保存をはかるうえで発掘調査を実施いたしました。その結果奈良，平安時代の住居址，建物址，溝などが発見されました。

本報告書はこの調査結果をまとめたものであり，当地域の歴史の解明，また，埋蔵文化財に対する理解を深めるための資料として活用されれば幸いであります。

最後に，この調査の実施にあたり多大なご協力を賜った関係機関の方々，また，発掘作業に携わった作業員の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

小山市教育委員会教育長

慶野 恒徳

例　言

1　本書は，誠和化学株式会社による工場建設に伴って発掘調査された，栃木県小山市大字粟宮字東道上894－4ほかに所在する宮内東遺跡(第2次調査)の発掘調査報告書である。

2　発掘・整理事業は，誠和化学株式会社の委託により小山市教育委員会が実施した。

3　発掘調査は下記のとおり2回にわたって行った。

試掘調査　　昭和60年 2月25日～同年 3月 9日

発掘調査　　昭和61年 4月15日～同年 8月31日

4　整理作業は，昭和61年 4月 1日～昭和62年2月28日にわたって行った。

5　発掘調査は別表に掲げる調査組織により実施した。

6　出土品の整理および図の作成は秋山隆雄が担当し，正田昌道，松島弘の補助を受けた。

7　発掘調査における写真，および遺物写真は秋山が撮影した。

8　本書の執筆は秋山が行った。

9　本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次のとおりである。

遺構　住居址1／60，土壙，溝およびピット群は不統一である。水糸レベルはすべて32.6mである。

遺物　土器は1／4，金属器については1／2とした。また，土器は断面を黒く塗りつぶしたものは須恵器，塗りつぶしていないものは土師式土器である。酸化炎焼成の土器は須恵器と同じ扱いをした。なお，土師器について，内面スクリーントーンで示したものは，黒色処理後ヘラミガキが施されたものである。

10　発掘から整理報告書に至るまで，下記の方々からご指導，ご協力を得た。記して謝意を表したい。岩崎卓也，鈴木一男(敬称略)

発掘参加者　池田トミ，大森隆志，黒沢ミヨ，椎塚治久，正田昌道，神保美代子，鈴木君江，鈴木隆夫，関口アキ，滝沢幸子，高崎なおえ，中沢茂雄，平栗美代子，藤木咲子，町田昭治，町田ヤイ，町田ミネ，山口耕一，山口徳枝，山口美代子，谷田貝洋子，山本シゲ，山本マツ，吉田邦子

調査組織

小山市教育委員会

教育長	慶野恒徳	（昭和59～61年度）
教育次長	鈴木勝明	（昭和59年度）
同	矢口喜佐夫	（昭和60，61年度）
社会教育課長	大橋好雄	（昭和59年度）
同	田中誠二	（昭和60，61年度）
文化係長	田村誠治	（昭和59～61年度）
文化係	飯村敏男	（昭和59年度）
同	福田定信	（昭和60，61年度）
同	生田目幸雄	（昭和61年度）
同	鈴木一男	（昭和59年度）
同	秋山隆雄	（昭和60，61年度）
同	町田行雄	（昭和59～61年度）
同	野口静男	（昭和59～61年度）

目　次

序

例言

Ⅰ　発掘調査に至るまでの経過…… 1

Ⅱ　宮内東遺跡の立地と環境…… 2

Ⅲ　遺跡の概観…… 4

Ⅳ　調査の経過…… 6

Ⅴ　遺構と出土遺物…… 8

（1）住居址…… 8

（2）建物址……40

（3）井戸，土壙……47

（4）溝……54

（5）グリッド出土遺物……57

Ⅵ　まとめ……59

挿図目次

第1図　宮内東遺跡周辺の遺跡分布図…… 3

第2図　宮内東遺跡周辺図…… 5

第3図　宮内東遺跡全測図…… 7

第4図　宮内東2次調査遺溝配置図…… 9

第5図　11号住居址，カマドおよび土層断面図……10

第6図　11号住居址出土遺物実測図……11

第7図　12号住居址実測図……13

第8図　12号住居址出土土器実測図……14

第9図　12号住居址出土鉄製品，紡錘車および土錘実測図……15

第10図　12号住居址，カマドおよび土層断面図……16

第11図　13号住居址実測図……18

第12図　13号住居址，カマドおよび土層断面図……19

第13図　13号住居址出土土器実測図……19

第14図　14号住居址実測図……20

第15図　14号住居址出土土器実測図(1)…21

第16図　14号住居址出土遺物実測図(2)…22

第17図　14号住居址出土鉄製品，土錘実測図……22

第18図　15号住居址，カマドおよび土層断面図……25

第19図　15,16号住居址実測図…… 26

第20図　15号住居址出土土器実測図(1)…27

第21図　15号住居址出土土器実測図(2)…28

第22図　16号住居址，カマドおよび土層断面図……28

第23図　16号住居址出土土器実測図……29

第24図　17号住居址実測図……33

第25図　17号住居址出土土器実測図……33

第26図　18号住居址実測図……34

第27図　18号住居址出土土器実測図……35

第28図　18号住居址，カマドおよび土層断面図……36

第29図 19号住居址実測図……36
第30図 19号住居址出土土器実測図……37
第31図 建物址位置図……39
第32図 1 ,1 A , 2 号建物址実測図……43
第33図 3, 4 号建物址実測図……44
第34図 5, 6, 7 号建物址実測図……45
第35図 8, 9 号建物址実測図……46
第36図 2, 7 号建物址出土土器実測図……46
第37図 4 号井戸出土土器実測図……47
第38図 1, 2, 3, 4 号井戸実測図……48
第39図 土壙位置図……40
第40図 土壙実測図（1）……50
第41図 土壙実測図（2）……51
第42図 土壙実測図（3）……52
第43図 1 号(1,2),25号（3),26号(4,5),28号（6),29号(7),34号(8), 36号(9)
土壙出土土器実測図……53
第44図 2 号溝, および出土土器実測図…55
第45図 3 号溝実測図……56
第46図 グリッド出土土器実測図……57
第47図 グリッド出土帯金具実測図……57

図　版

図版 1 作業風景
13, 14号住居址
図版 2 12, 15, 16号住居址
15号住居址遺物出土状態
図版 3 17号住居址
19号住居址
図版 4 4 号建物址
8, 9 号住居址
図版 5 26号住居址遺物出土状態
34号住居址遺物出土状態
図版 6 2, 3, 4 号井戸
5 号井戸, 2 号溝
図版 7 2 号溝
3 号溝
図版 8 11, 12号住居址出土土器
図版 9 15号住居址出土土器
図版10 16, 18, 19号住居址, 2 号溝, 4 号溝井戸出土土器
図版11 12, 14号住居址出土鉄器
図版12 墨書土器（1）
図版13 墨書土器（2）
図版14 墨書土器（3）
グリッド出土帯金具

Ⅰ 発掘調査に至るまでの経過

小山市大字粟宮地区は小山市中南部に位置し、思川東岸を南北に延びる台地上にあり宮内遺跡をはじめとする重要な遺跡が多数散在している。また国道４号線沿いを中心に近年宅地造成などの開発により埋蔵文化財の破壊が著しく進んでいる地域である。

ここに昭和59年12月に誠和化学（株）より小山市大字粟宮字東道上897番地他２筆（総面積2,225㎡）の国土利用計画法第23条第１項に係る土地売買等届出書（売買面積 2,000㎡）以上の提出があった。

当該地は，昭和57,58年度に住宅建設に伴う発掘調査を実施し，住居址，溝，土壙等を検出した隣接地であり，宮内東遺跡（540,000㎡）地内であることもあり，工場建設等の開発行為に対しては，調査を必要とする旨の回答を行った。

開発主体者である誠和化学（株）より昭和60年2月に遺跡の有無，規模等を明らかにするための確認調査を実施するこで合意が得られたので，文化財保護法第98条の２の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官あてに進達し，昭和60年２月25日 から３月９日までの期間（延べ12日）で確認調査を実施した。文化庁からは，昭和60年５月24日付60委保2-780号にて発掘通知を受理した旨の通知があった。

確認調査の結果，住居址と思われる遺構および多数の土壙，溝等が検出された。したがって，これらの遺構が開発により破壊されることが確実となったため開発計画の変更を要望した。しかし計画の中止および変更は不可能とのことから記録保存のため発掘調査を実施する方向で協議を行った。

以上の協議に基づいて，発掘調査および報告書作成に必要な費用の全額を誠和化学（株）が負担することで合意が得られたので，昭和60年４月12日に委託契約を締結し，同年４月６日から同年８月31日までの期間で，小山市教育委員会が発掘調査を実施することになった。

（町田行雄）

Ⅱ 遺跡の立地と環境

宮内東遺跡は小山市大字粟宮字東道上897番地ほかに位置し，東北本線小山駅の南側3.2kmにある。遺跡のある小山市は，栃木県南部に位置し，東北本線，両毛線，水戸線，国道４号線・50号線が交錯する交通の要衝の地として，また近年は，首都圏の通勤圏として市街地が拡大し，県南地区の中核都市としておおきく変貌している。こうしたことから宅地開発，区画整理事業，工場建設などが盛んにおこなわれ，それに伴う発掘調査も数多く実施されている。

遺跡は小山市の中央部を流れる思川の東に広がる台地上に位置する。遺跡をのせる台地は，浸食谷が発達し，台地面を樹枝状に複雑に開析している。開析谷は幅200～300ｍを測り，水田が開かれている。標高は小山市北部の出井付近で47ｍ，南部の 武井付近で24ｍを測り，北から南に向かって緩やかに傾斜している。宮内東遺跡付近では34～35ｍで，当遺跡周辺での台地の幅は500ｍほどである。台地面と谷との比高は最大で１ｍほどである。

思川を見下ろす台地の西側縁辺部には先土器時代から中世にいたる遺跡が密に，台地中央部ではやや粗くなるものの数々の遺跡が広く分布している。

市内の奈良・平安時代の遺跡は，乙女不動原北浦遺跡（註１），八幡根東遺跡（註２），中久喜遺跡（註３），乙女不動原瓦窯跡(註４)，西山遺跡（註５）などが知られている。乙女不動原北浦遺跡は，台地の西端部に位置し，縄文時代後・晩期の住居址1，古墳時代中期の住居址13，平安時代の住居址29，などが調査された。

乙女不動原瓦窯跡は、下野薬師寺，下野国分寺，国分尼寺の瓦を供給した窯跡として知られる。確認調査によって４基の窯と灰原，工房址などが検出された。

八幡根東遺跡では，奈良・平安時代に属する住居址が45軒調査されており，なかでも土師器を焼成した土壙が注目される。

中久喜遺跡では，奈良・平安時代の住居址が31軒検出されている。

西山遺跡では，４軒の奈良時代に属する住居址が調査されている。

小山市域では，上記の遺跡のほか発掘調査によりこの時期の集落跡の類例が増加してきている。

註１　三沢正善，他『乙女不動原北浦遺跡』（小山市文化財報告書11集）小山市教育委員会　昭和57年

註２　昭和56,57年（財）栃木県文化振興事業団調査

註３　昭和56,57年（財）栃木県文化振興事業団調査

註４　坂詰秀一，他『乙女不動原瓦窯跡確認調査報告書』小山市教育委員会　昭和52年

註５　昭和60年小山市教育委員会調査

1 小山城跡	9 下泉古墳群	17宮内遺跡	25東雲遺跡	33町屋遺跡
2 長福城跡	10薬一神社古墳	18浅間遺跡	26五料遺跡	34駅南遺跡
3 外城遺跡	11寒川古墳群	19千駄塚古墳	27治松遺跡	35中道北遺跡
4 外城２号墳	12茶臼塚古墳	20牧の内古墳群	28北浦遺跡	36六本木遺跡
5 神鳥谷遺跡	13毘沙門山古墳	21道ヨリ東遺跡	29雷電神社古墳	37中道南遺跡
6 宮内古墳群	14鶴巻山古墳	22中渋辺遺跡	30小森遺跡	38本田遺跡
7 宮内２号墳	15藤塚古墳	23八幡古墳群	31浅間東遺跡	39網戸城跡
8 井岡遺跡	**16宮内東遺跡**	24八幡前遺跡	32亀田遺跡	

第１図　宮内東遺跡周辺の遺跡分布図

Ⅲ 遺跡の概観

遺跡は小山市の中央部に位置し，市内を流れる思川の東に広がる台地上に立地している。「小山市遺跡地図」には，宮内東遺跡として東西600ｍ，南北800ｍの範囲で遺跡が示され古墳～平安時代までの遺物が採集され，集落跡として登録されている。標高は33～34ｍで北から南にかけてわずかに傾斜しているもののほぼ平坦面をなしている。調査予定区の地目は陸田である。

思川の東に広がる台地上には数々の遺跡が分布する。宮内東遺跡周辺では，宮内北遺跡，宮内２号墳，千駄塚古墳，神鳥谷遺跡どが知られる。小山市の南部に位置するこの地域は近年住宅造成，区画整理事業などによる土地開発が急増し，それに伴い発掘調査も増えてきている。

本遺跡の調査は今回の調査を含め計２回にわたる調査が実施されている。１次調査は，宅地開発に伴う事前の発掘調査で，調査対象面積2,222㎡で住居址９，溝２，井戸３，土壙などが調査されている。

２次調査は，工場建設に伴う事前の発掘調査で，１次調査区に隣接する2,225㎡について実施した。取り付け道路をのぞくと長さ44ｍのほぼ正方形の区画である。実際の調査面積は1,650㎡である。調査の結果，１次調査で検出された２号溝の延長部分を確認したほか，住居址９，建物址９，溝２，井戸５，土壙などを検出した。

住居址は，奈良・平安時代に属するものである。１軒だけカマドを東にもつほかは，北側にカマドを付設してある。

建物址は確実なものは９棟である。方向を同じくするものや，切り合い関係にある柱穴もあり時期的に差があることも十分考えられる。また，多数発掘されたピット群も柱穴と思われるものが多数ある。

井戸は，完掘できたものは２基で，４号井戸から底付近で杯が検出され，平安時代に属するものと思われた。

溝は２本検出された。２号溝については，１次調査の延長部分を調査することができ，２回にわたる調査で，南北66ｍ，東西29ｍに及ぶことが判明した。

土壙は，方形，円形のものなど規模にやや差があり，遺物が伴い時期が判明したものは僅かにすぎない。

２次調査までで発掘された遺構は，住居址18，溝３，建物址９，井戸10，土壙などである。以上２回にわたる発掘調査の成果からみると本遺跡は奈良・平安時代に営まれた集落跡と考えられる。

各時期の集落跡は発掘区内で完結するものではなく，発掘調査の成果からみてもまだ広がりをみせるようである。しかし，東側と西側に開析谷がはいこんでいることから，開析谷をそれぞれの限界として集落は台地上に南北に分布すると思われる。

第2図　宮内東遺跡周辺図

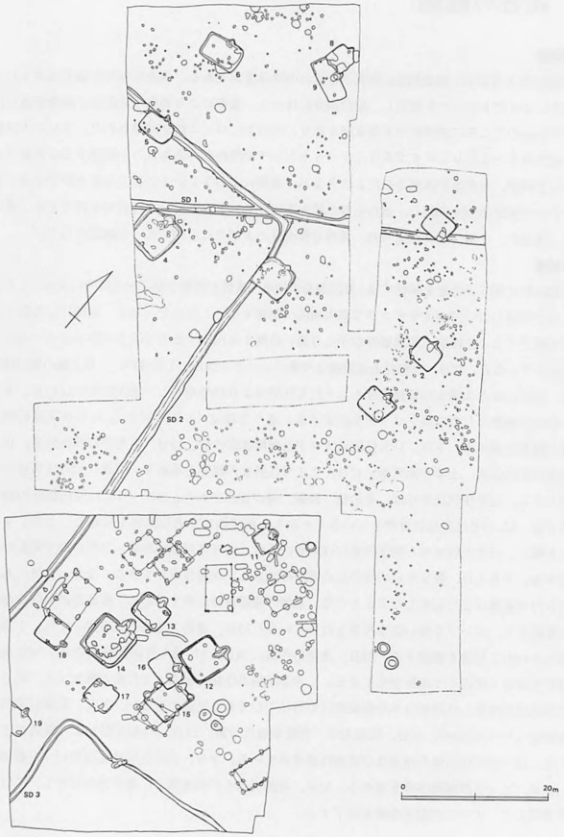
Ⅵ 調査の経過

確認調査

昭和60年２月25日、調査開始。発掘予定区の旧状は陸田である。調査区の南北軸を基準として４ｍおきに２ｍのトレンチを設定し、確認調査にはいる。重機により耕作土を除去し精査を進めた。表土下30cmのところに赤褐色の不透水層があり，その下にローム層が確認された。トレンチは長さ30ｍ程で第１～９トレンチまであり，１～８トレンチで黒色土の落ち込みと確認することができ，同時に土師器，須恵器が採集された。３月５日，重機によるトレンチの排土作業を終了する。各トレンチの土層断面図を作製し，落ち込みの範囲を図化し，９日，すべての作業を終了する。落ち込みは，住居址，土壙，溝と考えられ，遺構は調査区の大部分に広がることが確認された。

発掘調査

昭和60年４月15日調査を開始する。確認調査の結果，遺構が調査予定区の大部分に及ぶことから，施工者との話し合いで表土をダンプで他の場所へ廃棄することにした。19日，重機による表土除去作業を終了する。土師器，須恵器等がかなり高い位置から出土するので表土の除去はローム層上面の黒色土でとめる。22日，北側部分遺構確認作業にはいる。27日，１号井戸，１号土壙の検出作業。30日，住居址は１次調査の継続番号として11号住居址より随時命名し，検出作業にはいる。５月２日，磁北を基準として12ｍグリッドを設定する。遣り方設定（レベル33ｍ）。11号住居址の周辺の土壙の調査を進める。９日，11号住居址カマド土層断面図作製。13日，２号井戸検出作業。16日，３号井戸検出作業。土壙平面実測。17日，１２号住居址の精査を進める。27日，12号住居址より鉄斧出土する。12号住居址からは，その他，鉄鏃，鎌が検出された。30日，13,14号住居址の精査。６月５日，15,16号住居址は重複していることから，確認面にて新旧関係を判断し，セクションベルトを残し，15号住居址から検出作業にはいる。７日，４号井戸検出作業。井戸の底で完形の杯が出土する。７月１日，数日らいの雨のため遺跡が冠水し，現場作業ができなくなる。９日，水はひいたものの遺構はまだ冠水したままなので，南側の遺構確認作業を進める。確認面が軟弱なため作業が難航する。ポンプを使い排水作業を行っている。19日，遺構の確認作業を終了する。１次調査で検出された２号溝を確認する。22日，溝検出作業。24日，17,18号住居址検出作業。18号住居址は掘り方が深く床近くで遺物が出土する。５号井戸検出作業。湧き水で作業が難航する。25日，19号住居址検出作業。住居址は半分程発掘区の外にのびており完掘できない。26日，発掘区南部分遣り方設定（レベル33ｍ）。30日，筑波大学　岩崎卓也氏来跡。31日，14号住居址より鉄具出土。８月１日，12～18号住居址の精査及び実測作業進めている。９日，18号住居址周辺のピット群検出作業。24日，ピット群実測作業を進める。30日，遺跡周辺を平板実測し，遣り方をはずし，31日，器材を撤収して、すべての現場作業を終了する。



第3図　宮内東遺跡全測図

Ⅴ 遺構と出土遺物

（1）住居址

11号住居址（第5図）

発掘区の北側に位置し，西側コーナーとカマド付近が土壙と切り合う。

規模は南北2.7m×東西3.15m，深さ35cmをはかる方形の小型の住居である。主軸はN-16°-E。カマドは北壁に中央部に構築され，長さ1.55m，幅1.1mを測る。焚口付近は床を20cmほど掘り下げてあり，深さ18cmほどの円形のピットがある。煙道は右側部分がテラス状になっており須恵器の壺がつぶれた状態で検出された。ピットは住居内よりP₁　　まで検出したがいずれも掘り込みが浅い。

遺物はカマド内より須恵器壺（11），杯（4），（2）が出土する。また，東壁際に杯（5），（6），（8）が出土する。墨書土器はカマド，床中央部北側によって出土している。

12号住居址（第7図）

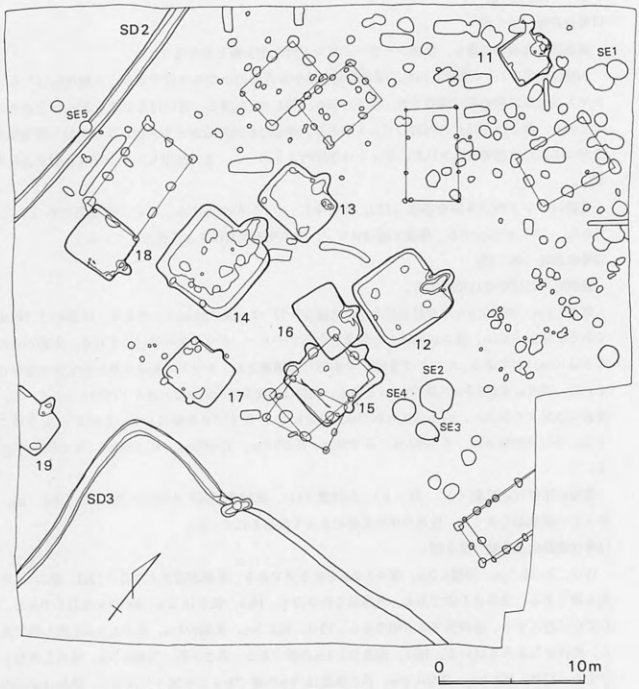
発掘区のほぼ中央に位置する。

東西5.3m，南北5.5mの方形を呈する。主軸はN-17°-E。深さ30cmほどである。床面はほぼ平坦である。幅20～30cm，深さ10cmほどの周溝が北東コーナー，カマドをのぞいてまわる。床面からの深さは10cmほどである。カマドは北壁やや右寄りに構築され、カマドの袖は白褐色粘土が使用されている。規模は南北2.5m×東西1.7mを測る。焚口は床面を20～30cmほど掘り下げつくられている。煙道は住居より張出し，斜めに立ちあがる。柱穴はP₁～P₈まで6本検出しているがP₁～P₆を柱とする。各柱穴の深さは，P₁が66cm，P₂が50cm，P₃が72cm，P₄が75cm，P₅が60cm，P₆が36cmである。

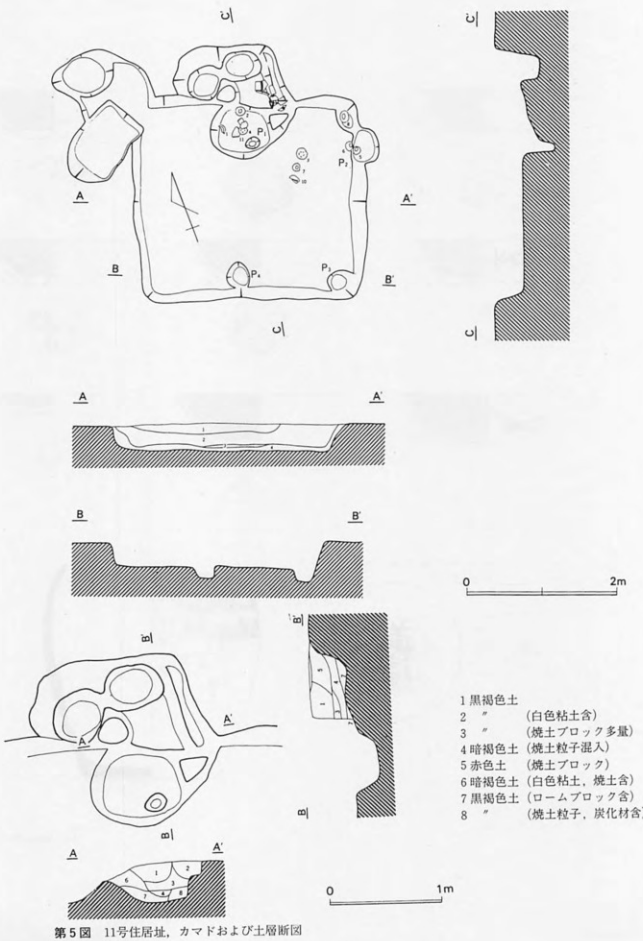
遺物は南壁付近で蓋（1），杯（2），台付甕（11），紡錘車（20）が出土した。斧，刀子，鎌，鎌などの鉄製品の多くは，住居の中央北側によって検出されている。

12号住居址出土遺物（第9図）

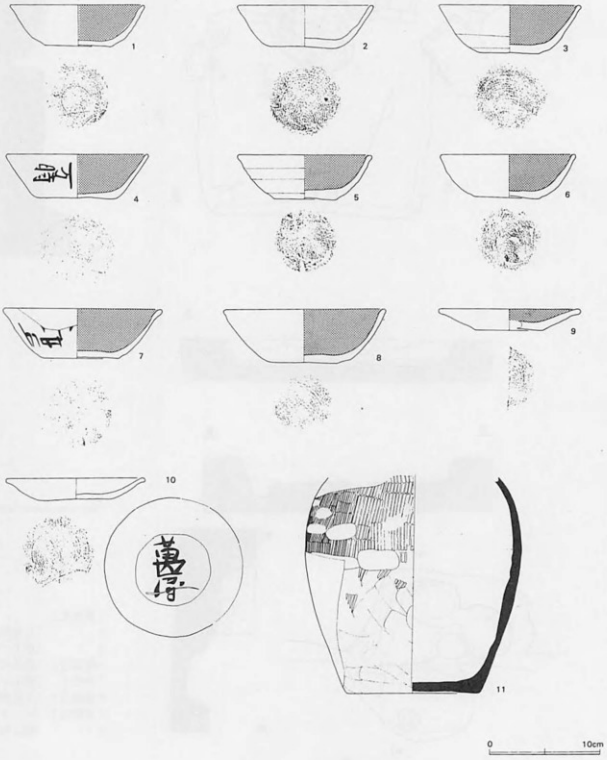
12は，長さ8.5cm，刃幅4.9cm，厚さ2.2cmを測る斧である。基部が袋状となる。**13**は，幅3.4cmを測る鎌である。全長は不明である。基端部を折り辺す。**14**は，長さ14.2cm，幅0.9cmの刀子である。わずかに外反する。茎の長さは不明である。**15**は，幅3.1cm，茎幅0.8cm，長さ8.8cmを測る鏃である。腸抉がおおきくはいる。**16**は，幅推定3.4cmの鏃である。長さ不明。茎幅0.7cm。根が三角形を呈する。**17**は，幅0.9cm，茎幅0.6cm，長さ推定12.3cmの鏃である。先端を欠損する。腸抉は直線的に開く。**18**は，長さ推定13.2cmの錐である。幅0.6cm。錆化が著しい。**19**は，断面が方形を呈する鉄製品である。現存の長さ4cm。**20**は，径4cm，高さ2.1cmを測る紡錘車である。滑石製。**21**は，径5.3cm，高さ1.9cmを測る土製の紡錘車である。淡黄褐色を呈する。**22**は，長さ2.3cm，径0.8cmを測る土錘である。黄褐色。



第4図　宮内東2次調査遺構配置図



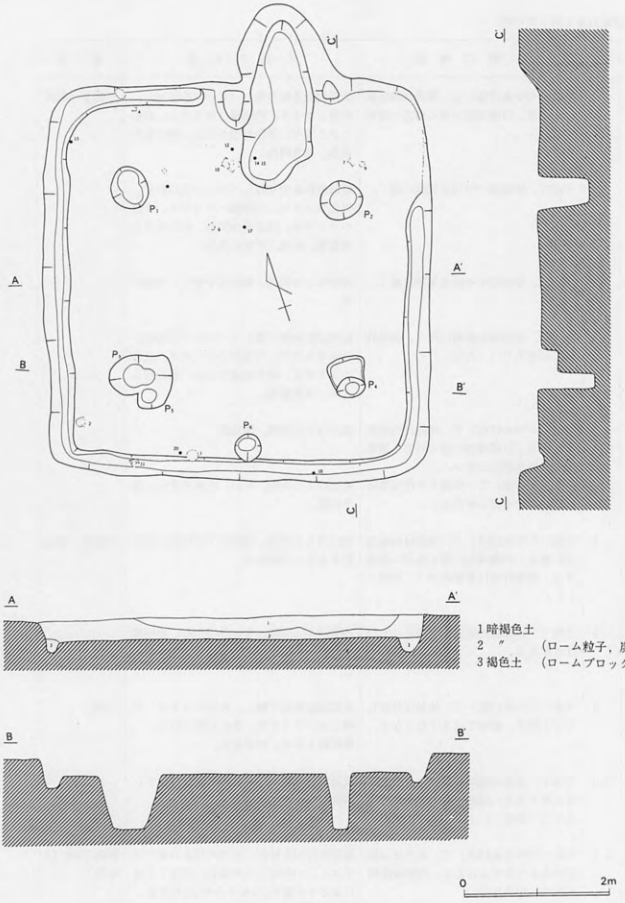
第5図 11号住居址，カマドおよび土層断図



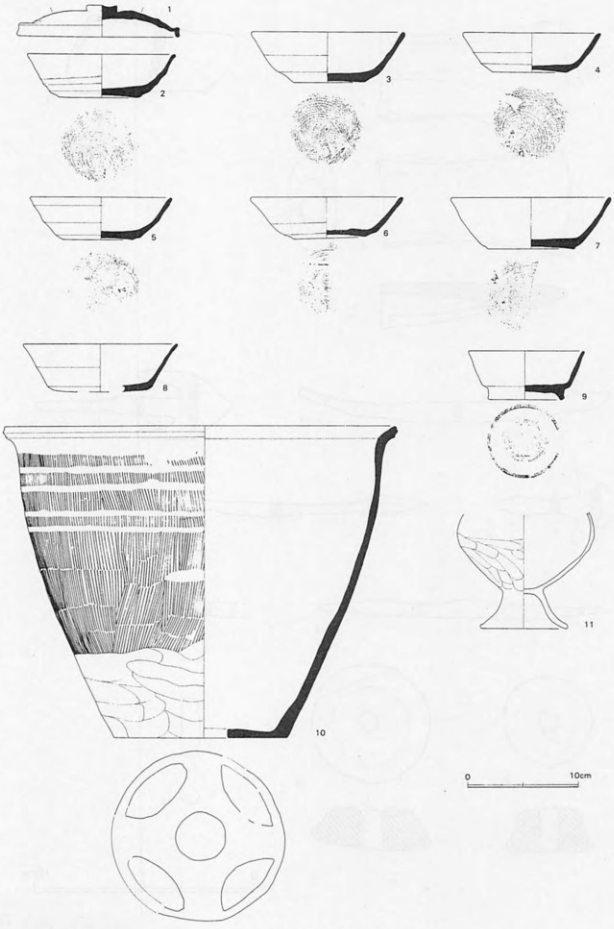
第6図　11号住居址出土遺物実測図

11号住居址出土土器（第6図）

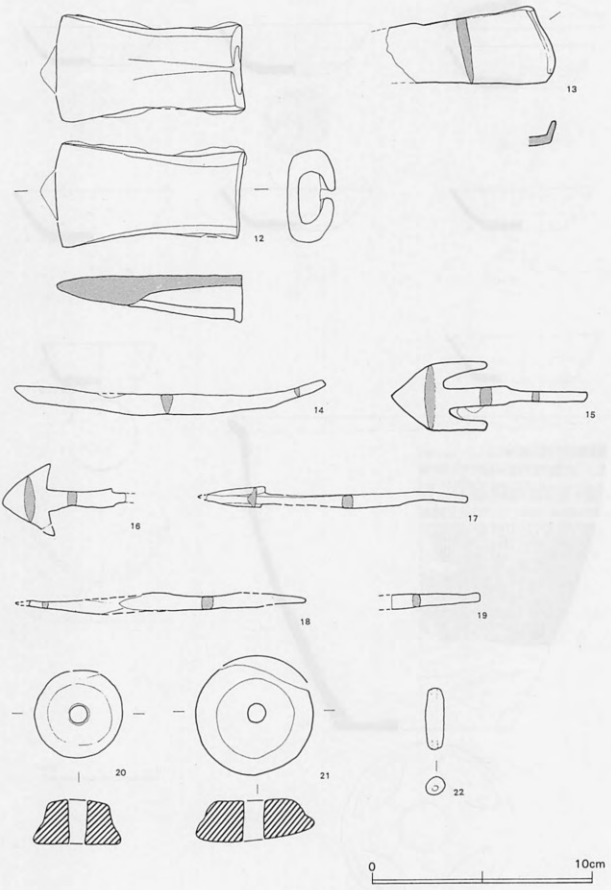
器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器杯	1	平底（ややあげ底）で、体部は内反気味に開き、口縁端部は短く外方へ屈曲する。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。外面ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。細砂粒を含む。淡黄褐色。	口縁部一部欠
土師器杯	2	平底で、体部はやや内反気味に開く。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。外面ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、底部ヘラミガキ。内面暗赤褐色、外面灰白色器壁荒。砂粒、石英を含む。	
土師器杯	3	平底で、体部はやや内反気味に開く。	技法は1と同様。細砂粒を含む。明褐灰色。	
土師器杯	4	平底で、体部は直線的に開く。体部外面に墨書あり（「万時」）。	底部回転糸切り離し（（ロクロ左回転）外面ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	5	平底（ややあげ底）で、体部は内反気味に開き、口縁端部は短く外方へ屈曲する。外面凹凸目立つ。	技法は1と同様。黒褐色。	
土師器杯	6	平底（あげ底）で、体部やや内反気味に開く。やや深さがある。	技法は1と同様。小石、砂粒を含む。暗赤褐色。	
土師器杯	7	平底（ややあげ底）で、体部は内反気味に開き、口縁端部は短く外方へ屈曲する。体部外面に墨書あり（「万時？」）。	技法は4と同様。器面にスス付着。細砂粒を含む。明褐灰色。	口縁部一部欠
土師器杯	8	平底で、体部は内反気味に開く。やや深さがある。	技法は4と同様。3㎜位の小石、細砂粒を含む。黒褐色。	
土師器皿	9	平底（ややあげ底）で、体部は外反しながら開き、端部では水平近くなる。	底部回転糸切り離し。外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、黒色処理される。細砂粒を含む。暗赤褐色。	1/2欠
土師器皿	10	平底で、体部は直線的に開き、口縁端部は短く外方へ屈曲する。底面に墨書あり（「萬時」）。	底部回転糸切り離し。内外面ヨコナデ。細砂粒を含む。明黄褐色。	
須恵器壺	11	平底（中央はあげ底）で、最大径は体部中央よりやや上にある。内面輪積痕明瞭で、凹凸目立つ。	胴部平行叩き目痕。下半は叩きの後ヘラケズリ。一部叩き目が残る。内面下半指によるナデ整形。砂粒を含む。暗灰黄色。酸化炎焼成。	胴部2/3欠、口縁部欠



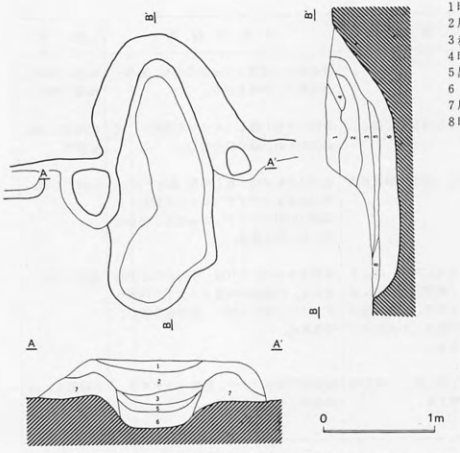
第7図 12号住居址実測図



第8図　12号住居址出土土器実測図



第9図　12号住居址出土鉄製品，紡錘車および土錘実測図



第10図　12号住居址カマドおよび土層断面図

12号住居址出土土器（第8図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器蓋	1	口縁部はわずかに外反して開く。中央部がわずかに尖ったつまみが付く。器面凹凸目立つ。	器面外面上部回転ヘラケズリ（右回転）下半ヨコナデ。2㎜小石、細砂粒を含む。暗青褐色。	内面にスス付着
須恵器杯	2	平底（あげ底）で、体部はやや内反気味に開き、口縁端部でわずかに外反する。器面凹凸目立つ。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。外面ヨコナデ。7㎜小石、細砂粒を含む淡黄褐色。	
須恵器杯	3	平底（ややあげ底）で、体部は直線的に開く。器面凹凸目立つ。	技法は2と同様。3～4㎜小石、紺色粒子を含む。暗青灰色。	口縁部1/3残
須恵器杯	4	3と同様。底中央部で器壁が薄い。	技法は2と同様。5㎜小石、紺色粒子を含む。	口縁部1/8残
須恵器杯	5	2と同様。凹凸目立つ。	技法は2と同様。6㎜小石、砂粒を含む青灰色。	口縁部1/4残
須恵器杯	6	2と同様。底中央部で器壁が薄い。凹凸目立つ。	技法は2と同様。細砂粒を含む。灰白色	底部1/2残、口縁部1/3残

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器杯	7	2と同様。	技法は2と同様。3㎜位の小石、石英、紺色粒子、砂粒を含む。	底部1/2残、口縁部1/3残
須恵器杯	8	平底で、体部わずかに外反して開く。体部器壁薄い。	底部ヘラ切り離し（ロクロ右回転）。2㎜位の小石、細砂粒を含む。	口縁部1/3残、底部欠
須恵器椀（高台付）	9	体部は直線的に開く。高台は断面長方形。	底部は回転糸切り離しの後、高台を付し、その周囲をヨコナデ（ロクロ右回転）。器面内外面ヨコナデ。3㎜小石、細砂粒を含む。胎土精良。	口縁部1/4残
須恵器甑	10	底部は平底で、中央部に円形、隅に半円形の透かしが4ヶ所穿孔される。体部は内反して立ち上がり、口縁端部で外反して開く。口縁部は、中央部がつまみだされ凸状となる。	体部下半ヘラケズリ後、平行の叩きが施される。口縁部内外面ヨコナデ。内面ヘラケズリ（単位不明）。細砂粒を含む。明青灰色。	胴部1/4残
土師器台付甕	11	脚部は大きくハの字状に開く。体部は中位にて屈曲し内彎する。	脚部内外面ヨコナデ。器面ヘラケズリ。内面指ナデにより平滑。	口縁部欠、器面スス付着

13住居址（第11図）

12号住居址の西側に位置する。

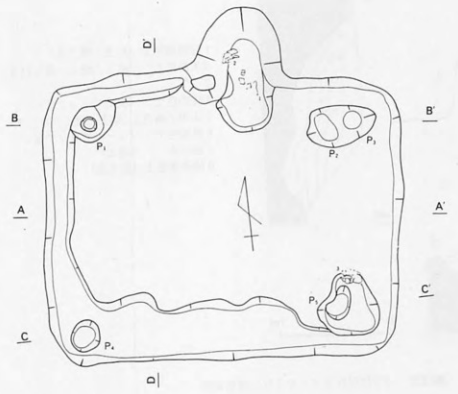
規模は南北3.9m，東西4.7mの方形を呈する。主軸はN-5°-E。深さ50cmほどである。幅35cm，深さ7cmほどの周溝が北壁の左側，西壁に廻り，南壁で崩れている。カマドは北壁のほぼ中央に構築されている。カマドの左袖には白色粘土が使用されている。規模は長さ1.65m，幅1.35mを測る。焚口は床面を15cmほど掘り下げてつくられている。ピットは P_1 ～ P_5 まで5本検出しているが，いずれも掘り込みが浅い。

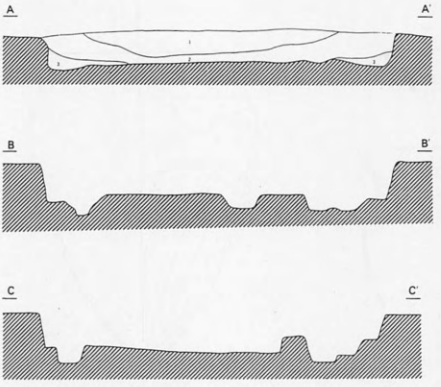
遺物はカマド内から高台付盤（1），甕（2）が出土している。甕（3）は P_3 付近より出土している。

14号住居址（第14図）

発掘区の中央13号住居址の南側に位置する。東西6.15m，南北6.2mの方形を呈する大型の住居址である。北東コーナーを土壙と重複する。主軸はほぼ磁北を向く。深さ40～50cmで，南から北へわずかに傾斜している。幅40～60cm，深さ15cmほどのテラス状になっている。カマドは北壁やや右寄りにつくられている。焚口は床面を30cmほど掘り込み，煙道は住居より張りだし，底面が階段状になっている。カマドの袖には白色粘土が使用されている。規模は南北2.7m，東西2mを測る。ピットは P_1 ～ P_{14} まで検出しているが，P_1，P_3，P_4，P_7，P_8，P_{10}が主柱になるものと思われる。P_{13}，P_{14}は斜めに掘り込まれている。

遺物は住居址の東側によっ出土している。鉄具は中央左によって床面がかなり浮いた状態で検出された。また，帯金具（巡方）の破片が出土している。（実測不可）

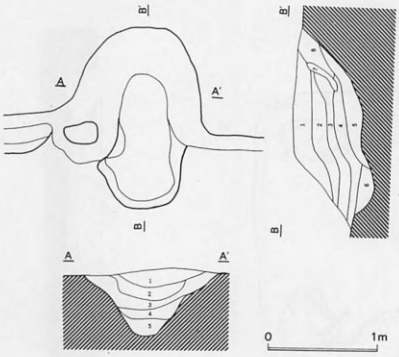




1 暗褐色土
2 黒色土　（炭化材，白色粘土含）
3 黒褐色土
4 褐色土　（ロームブロック多量）

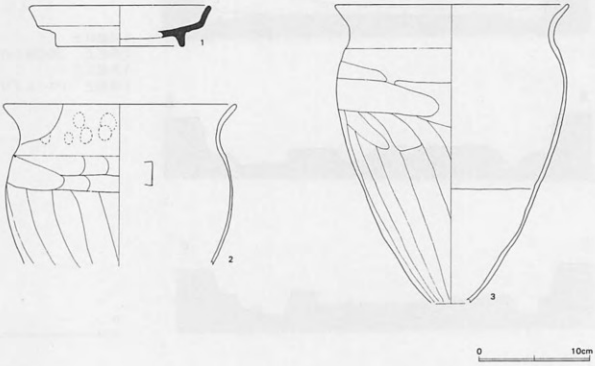
0　2m

第11図　13号住居址実測図

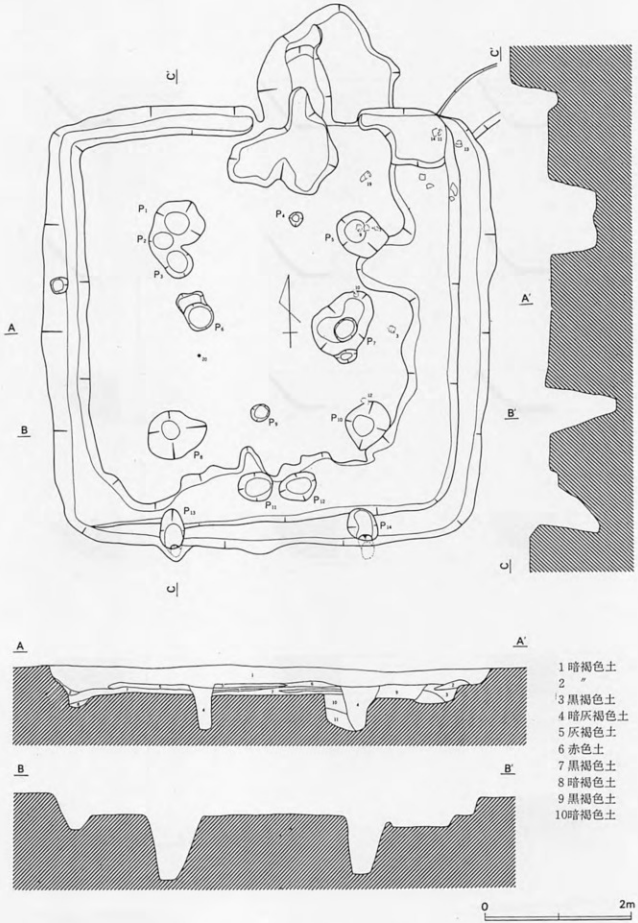


1 暗黒褐色土（粘土，焼土含）
2 灰褐色土　（粘土，焼土，炭化材含）
3 〃
4 暗赤色土　（焼土ブロック含）
5 灰赤土褐色土（粘土，焼土ブロック）
6 黒褐色土　（ロームブロック含）
7 赤色土　（焼土）
8 暗赤褐色土（焼土含）

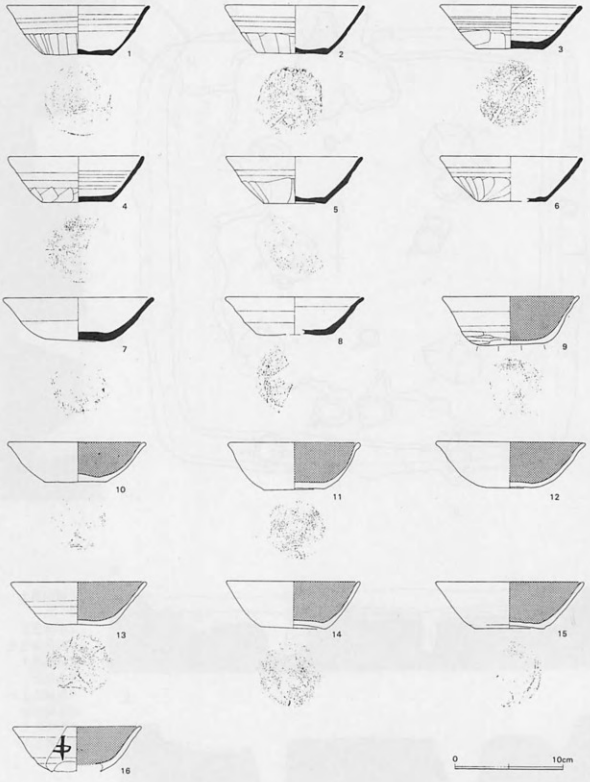
第12図　13号住居址カマドおよび土層断面図



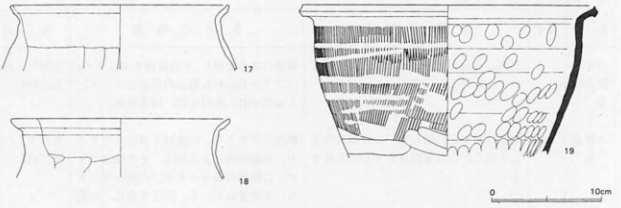
第13図　13号住居址出土土器実測図



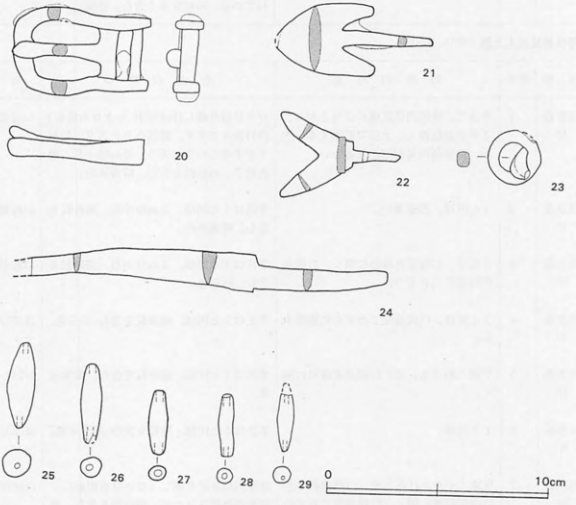
第14図 14号住居址実測図



第15図　14号住居址出土土器実測図(1)



第16図　14号住居址出土遺物実測図(2)



第17図　14号住居址出土鉄製品，土錘実測図

13号住居址出土土器（第13図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 高台付 盤	1	平底に高台が付される。短い口縁部はわずかに外反して開く。	底部は高台を付し、その周囲をヨコナデ、（ロクロ右回転）。器面内外面ヨコナデ。5㎜位小石、砂粒を記。暗青灰色。	底部欠、口縁部1/4残
土師器 甕	2	胴部は緩やかに脹らみ、口縁部は外反して開く。口縁端部はわずかに肥厚する。	胴部ヘラケズリ、口縁部下ヨコヘラケズり。口縁部指による押圧、その後ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。内面ヘラケズリ、器壁荒れている。砂粒を含む。赤褐色。	底部欠、口縁部1/4残
土師器 甕	3	最大径は胴上位にある。口縁部は外反して開く。	胴部ヘラケズリ、口縁部下ヨコヘラケズリ。口縁部内外面ヨコナデ。内面器壁荒れている。砂粒を多く含む。赤褐色。	底部欠、口縁部1/4残

14号住居址出土土器（第15.16図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 杯	1	平底で、体部内反気味に立ち上がり、下半が器壁薄く、上位で肥厚する。内面、口縁部内外面凹凸目著しい。	ロクロ切り離し技法不明（ロクロ右回転）内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。器面下半手持ちヘラケズリ。2㎜位小石、紺色粒子、細砂粒を含む。暗青灰色。	口縁部1/3残
須恵器 杯	2	1と同様。器壁薄い。	手法は1と同様。3㎜位小石、細砂粒を含む。暗青灰色。	口縁部1/3残
須恵器 杯	3	平底で、口縁部直線的に開く。口縁部内外面凹凸目立つ。	手法は1と同様。3㎜位小石、細砂粒を含む。灰白色。	口縁部3/4残
須恵器 杯	4	3と同様。口縁端部でわずかに肥厚する。	手法は1と同様。細砂粒を含む。灰白色。	底部3/4残、カマド
須恵器 杯	5	平底（あげ底）で、口縁部直線的に開く。	手法は1と同様。細砂粒を含む。暗青灰色。	1/2残
須恵器 杯	6	1と同様。	手法は1と同様。砂粒を含む。暗青灰色。	底部2/3残、カマド
須恵器 杯	7	平底（ややあげ底）で、口縁部緩やかに内反気味に開く。口縁端部でわずかに外反する。器壁厚い。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。器面内外面ヨコナデ。細砂粒を含む。灰白色。	口縁部3/4残
須恵器	8	平底で、口縁部内反して立ち上がり、端部でわずかに外反して開く。口縁部内外面凹凸目立つ	底部回転ヘラ切り離し（ロクロ右回転不明）。器面内外面ヨコナデ。紺色粒子、細砂粒を含む。青灰色。	1/4残
土師器 杯	9	平底で口縁部内反し、上位よりわずかに外反して開く。やや深さがある。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）後、ヘラケズリ。　器面外面ヨコナデ、下半ヘラケズリ。内面ヨコヘラミガキ、底部	口縁部1/3残

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
			ヘラミガキ、黒色処理される。細砂粒を含む。赤褐色。	
土師器杯	10	平底で、口縁部内反して大きく開き、端部わずかに屈曲して外方へ開く。底部凸状。	手法は9と同様。石英、細砂粒を含む。暗褐色。	口縁部1/4残
土師器杯	11	平底（ややあげ底）で、口縁部内反して開き、口縁端部で肥厚し短く外方へ屈曲する。やや深さがある。	手法は9と同様。砂粒を含む。器壁荒れている。淡黄褐色。	
土師器杯	12	平底（ややあげ底）で、口縁部内反して大きく開き、端部わずかに外方へ屈曲する。やや深さがある。	底部切離し技法不明。器面外面ヨコナデ内面細いヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。器壁荒れている。砂粒を含む。暗褐色。	1/2残
土師器杯	13	平底で、口縁部直線的に開く。	手法は9と同様。石英、砂粒を含む。淡黄褐色。	口縁部1/3残
土師器杯	14	平底（あげ底）で、口縁部内反して開く。	手法は9と同様。細砂粒を含む。赤褐色。	口縁部1/5欠
土師器杯	15	平底（ややあげ底）で、口縁部直線的に開く。	手法は9と同様。細砂粒を含む。淡黄褐色。	1/3欠、カマド
土師器杯	16	口縁部直線的に開き、端部わずかに外方へ屈曲する。体部外面に墨書あり（「中」）。	手法は9と同様。砂粒を含む。赤褐色。	底部欠、口縁部1/8残
土師器甕	17	口縁部「コ」の字状を呈する。口縁端部はつまみ出される。体部境界はヘラケズリで稜が形成される。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁下部ヨコヘラケズリ。細砂粒を含む。赤褐色。	口縁部1/4残
土師器甕	18	17と同様。	手法は17と同様。細砂粒を含む。赤褐色	口縁部1/4残
須恵器鉢	19	体部内反して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反して短く開く。口縁端部は内外面ともつまみだされ稜をもち、中央部は凸状となる。	体部外面下半ヘラケズリ。上部は平行の叩きが施される。口縁部内外面ヨコナデ内面接合痕が残る。指による押圧で凹凸著しい。砂粒を含む。灰黄色。	底部欠、口縁部1/4残

14号住居址出土遺物（第17図）

20は、長さ6.2cm，幅4cm，高さ1.4cmを測る鈹具である。基部に横棒をつくりその前にT字形の刺金をとりつける。刺金は固定されている。帯金具として使用されたものであろう。21は，長さ推

定7.2cm，幅3.3cm，茎幅0.6cmの鏃である。先端部を欠損する。腸抉がおおきくはいる。**22**は，長さ5.4cm，幅3.9cm，茎幅0.4cmを測る雁股鏃である。茎と根は関によって明瞭に区別される。**23**は，茎2.3cmの環状の鉄製品である。鎖状に連結して使用したと思われるが、用途は不明。**24**は，幅1.7cm，茎幅0.9cmの刀子である。先端部を欠損する。25～29はすべて土錘である。**25**は幅1.2cm，長さ3.9cm，**26**は長さ3.6cm，幅1cm，**27**は長さ2.9cm，幅1.3cm，**28**は長さ2.8cm，幅0.7cm，**29**は長さ推定3.1cm，幅0.7cmをはかる。25,26は淡黄褐色，27,28,29は黒色を呈する。

15号住居址（第19図）

12号住居址の南側に位置し，16号住居址を切り，8．9号建物址と重復する。東西4.6m，南北5.2mの方形を呈する。主軸はN-10°-E。深さは20cmほどである。南側が幅90cmほどテラス状になっている。床面との比高は10cmである。カマドは北壁中央部につくられている。カマドの左側の袖には疑灰石が使用されている。煙道は住居より張出し，斜めに立ちあがる。

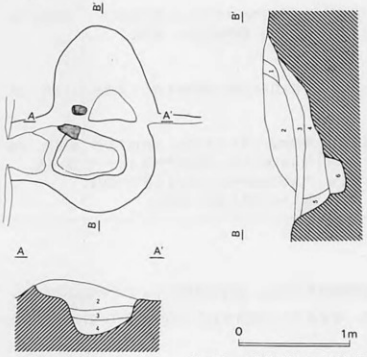
遺物は西壁際にまとって土師器が検出された他，焚口より須恵器高台付皿（25），杯（16）が出土した。

16号住居址（第19図）

15号住居址に切られる。

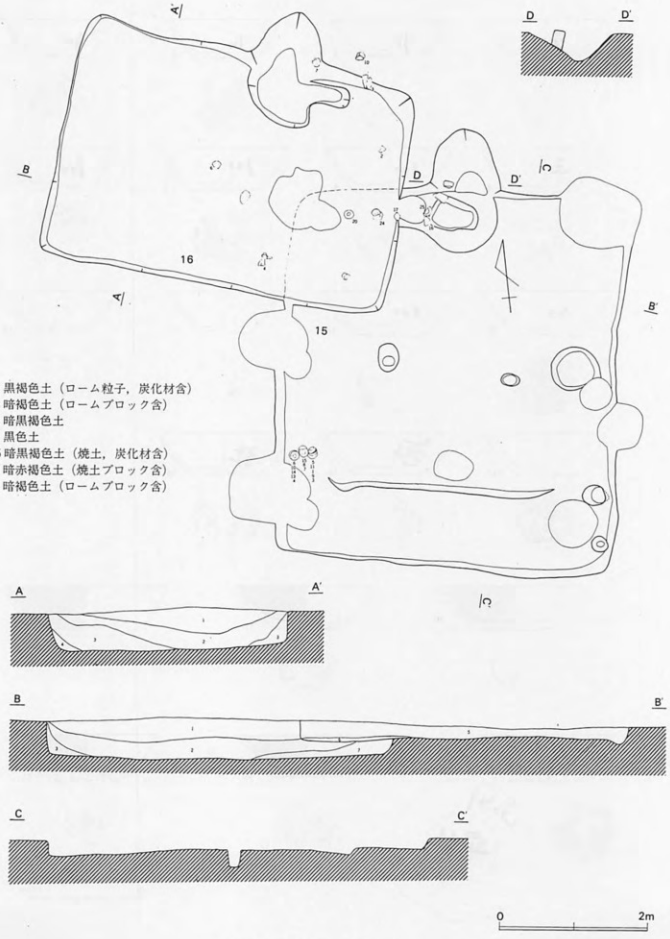
東西4.7m，南北3.2m方形を呈する。主軸はN-16°-E。深さは50cmほどで，中央部がやや深い。15号住居址の床面との比高は20～35cmである。カマドは北壁中央部やや右よりに構築されている。カマドの両袖は白色粘土が使用してある。焚口は床面を25cmほど掘り下げ，煙道は住居より張出し斜めに立ちあがる。当住居にともなうピットは検出されなかった。

遺物は住居の東側によって出土している。土師器杯（10）は住居外にあるが16号住居出土土器として扱う。

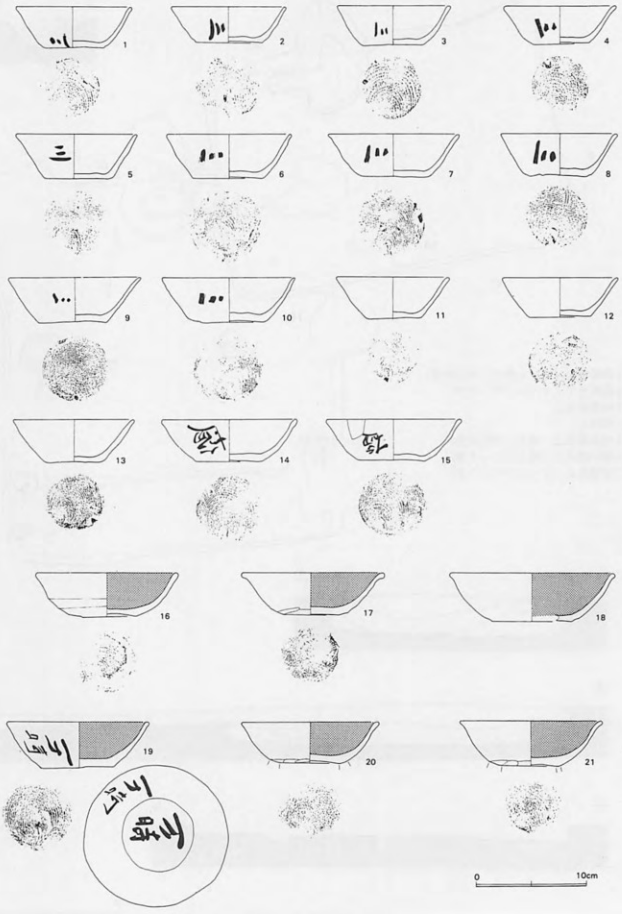


1層　赤褐色土（焼土）
2層　暗灰色土（粘土、焼土含）
3層　暗褐色土（灰化材、焼土含）
4層　褐色土　（焼土、粘土含）
5層　〃
6層　黒褐色土
7層　暗灰色土（焼土、炭化材含）

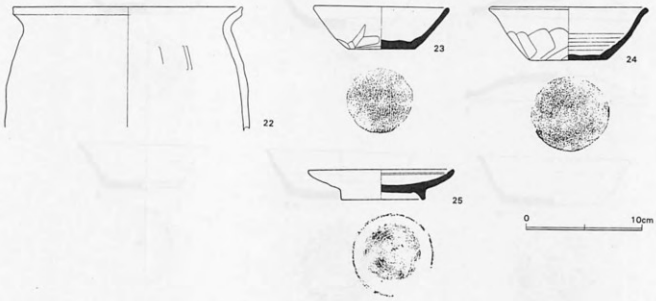
第18図　15号住居址カマドおよび土層断面図



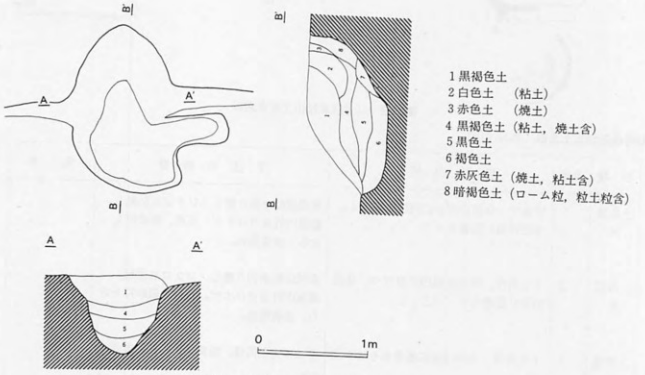
第19図　15, 16号住居址実測図



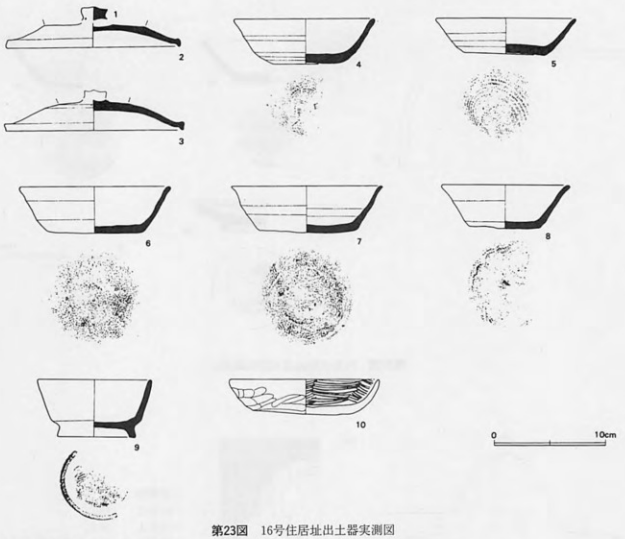
第20図　15号住居址出土土器実測図(1)



第21図　15号住居址出土器実測図(2)



第22図　16号住居址カマドおよび土層断面図



第23図　16号住居址出土器実測図

15号住居址出土土器（第20.21図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器杯	1	平底で、体部わずかに内反して開く。体部外面に墨書あり（「三」）。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。器面内外面ヨコナデ。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	2	1と同様。内面底部凹凸目立つ。体部外面に墨書あり（「三」）。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。器面内外面ヨコナデ。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	3	1と同様。体部外面に墨書あり（「三」）。	手法は2と同様。淡黄褐色。内面赤色濃い。	
土師器杯	4	1と同様。口縁端部でわずかに外方へ屈曲する。体部外面に墨書あり（「三」）。	手法は2と同様。2㎜小石、石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	5	1と同様。底部凹凸目立つ。体部外面に墨書あり（「三」）。	手法は1と同様。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	6	1と同様。体部外面に墨書あり（「三」）。	手法は1と同様。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器杯	7	1と同様。体部外面に墨書あり（「三」）。	手法は2と同様。4㎜小石、石英、細砂粒を含む。	
土師器	8	1と同様。底部糸切り離しによる凹凸目立つ。	手法は2と同様。細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	9	1と同様。器壁薄い。底部糸切り離し明瞭。体部外面に墨書あり（「三」）	手法は2と同様。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	10	1と同様。底部内面凹凸目立つ。体部外面に墨書あり（「三」）。	手法は2と同様。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	11	1と同様。	底部回転糸切り離し(ロクロ右回転不明)器面内外面ヨコナデ。細砂粒を含む。淡黄褐色。	
土師器杯	12	1と同様。	手法は2と同様。石英、細砂粒を含む淡黄褐色。	
土師器杯	13	1と同様。	手法は11と同様。細砂粒を含む。淡黄色色。	
土師器杯	14	平底で、体部わずかに内反して開き、端部でわずかに肥厚となる。体部外面に墨書あり（「塩」）。	手法は2と同様。赤色粒子、細砂粒を含む。明褐灰色。	
土師器杯	15	14と同様。（体部外面に墨書あり（「塩」））。	手法は2と同様。赤色粒子、細砂粒を含む。明赤褐色。	口縁部一部欠
土師器杯	16	平底（ややあげ底）で、体部内反して開く。外面凹凸目立つ。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。小石、砂粒を含む。暗赤褐色。	
土師器杯	17	平底で、体部は内反気味に開き、口縁端部は短く外方へ屈曲する。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。外面ヨコナデ、下部ヘラケズリ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。小石、細砂粒を含む。暗灰色。	口縁部一部欠
土師器杯	18	17と同様。	手法は17と同様。細砂粒を含む。暗赤褐色。	口縁部1/2残底部欠
土師器杯	19	17と同様。器面凹凸目立つ。体部外面に墨書あり（「万時」）。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。赤色粒子、石英、細砂粒を含む。暗赤褐色。	

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器杯	20	17と同様。	手法は17と同様。小石、細砂粒を含む。暗赤褐色。	
土師器杯	21	17と同様。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。外面ヨコナデ、下部ヘラケズリ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。細砂粒を含む。暗褐色。	
土師器甕	22	体部内反して立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反して短く開く。口縁端部はつまみだされ、口唇部は凹状となる。	体部内面ヘラケズリ、外面器壁摩耗して整形不明。口縁部内外面ヨコナデ。砂粒を含む。暗赤褐色。	口縁部1/2残、底部欠
須恵器杯	23	平底で、体部内反気味に立ち上がる。内面底部凹凸著しい。	ロクロ切り離し技法不明(ロクロ右回転)内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。器面下半手持ちヘラケズリ。細砂粒を含む。暗青灰色。	
須恵器杯	24	平底で、体部内反気味に立ち上がり、口縁端部でわずかに外反して開く。	手法は23と同様。細砂粒を含む。器面黒色。内面黒褐色。酸化炎焼成。	
須恵器高台付皿	25	底部は高台が付される。体部内反して短く立ち上がる。口縁端部内面に沈線が走る。	底部回転ヘラ削り。（ロクロ回転不明）高台部周辺ヨコナデ。器面内外面ヨコナデ。3～4㎜の小石、砂粒を含む。暗青灰色。	

16号住居址出土土器（第23図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器蓋	1	中央がわずかに尖る。	細砂粒を含む。事青灰色。	
須恵器蓋	2	口縁部はつまみだされ下方へ屈曲して開く。	器面外面上部回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）。下半ヨコナデ。5㎜位の小石、細砂粒を含む。青灰色。	2/3残
須恵器蓋	3	2と同様。口唇部凹状。	手法は2と同様。6㎜位の小石、砂粒を含む。灰色。	口縁部4/5残
須恵器杯	4	平底で（ややあげ底）で、体部はやや内反気味に開く。器壁厚い。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。内外面ヨコナデ。細砂粒を含む。暗青灰色。	2/3残
須恵器杯	5	平底で（ややあげ底）で、体部は直線的に開く。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。内外面ヨコナデ。4㎜位の小石、細砂粒を含む。	
須恵器杯	6	平底で、体部は直線的に開く。器面凹凸目立つ。	底部回転ヘラ切り離し(ロクロ右回転)。切離し痕不明瞭。7㎜位の小石、砂粒を	口縁部1/2欠

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
			含む。	
須恵器杯	7	平底で、体部は直線的に開き、口縁端部でわずかに外反する。器壁凹凸目立つ。	手法は6と同様。4㎜位の小石、細砂粒を含む。青灰色。	口縁部1/4残
須恵器杯	8	7と同様。	手法は6と同様。4㎜位の小石、細砂粒を含む。灰白色。	口縁部1/4残 底部3/4残
須恵器高台付椀	9	体部は直線的に開く。高台は断面長方形。	底部は回転糸切り離しの後、高台を付し、その周囲をヨコナデ（ロクロ右回転）。器面内外面ヨコナデ。2㎜位小石、細砂粒を含む。暗青灰色。	1/2残
土師器蓋	10	体部内反して開く。器面凹凸。	器面口縁部下ヘラケズリ口縁部口ヨコナデ。内面底部ヘラミガキ、上部ヨコヘラミガキ。細砂粒を含む。暗赤褐色。	

17号住居址（第24図）

14号住居址の南側に位置する。

東西4.1m，東西3.55mの方形を呈する住居址である。ピット群と重複している。主軸はほぼ磁北を向く。深さは15～20cmほどである。床は軟弱である。カマドは北壁ほぼ中央部に構築されているが掘り込みは浅い。

遺物は杯が3点出土している。

18号住居址（第26図）

発掘区の西側，2号溝の東側に位置する。4号建物址と重複している。

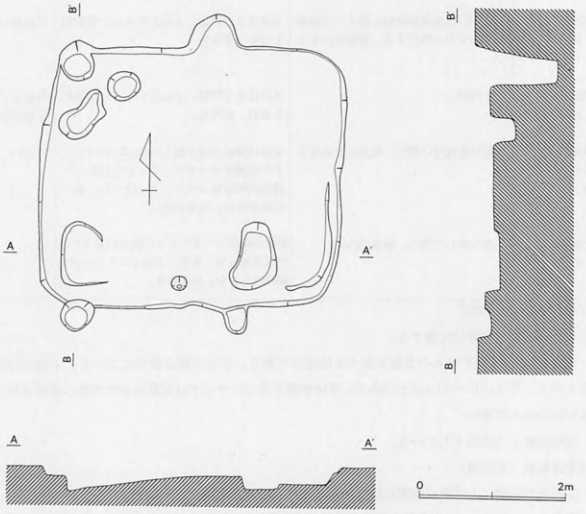
東西4m，南北3.8mの方形を呈する住居址である。主軸はN-92°-Eで本調査でこの住居址だけ東を向く。深さは50cmほどで，住居址中央部がやや高くなっている。カマドは東壁に南側によってつくられている。焚口は床面を27cmほど掘り下げており，煙道は階段状になっている。周溝は南東コーナー付近にあるが全周はしない。住居址に伴うピットは南側に3ヶ所検出したが，掘り込みは浅い。

遺物は東壁カマド周辺にまとまって検出された。焚口から底部（7），カマド内から椀（5），袖付近から土師器杯（2）が出土している。また，東壁際に土師器盤（3）が出土した。

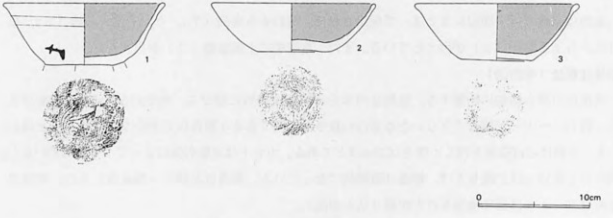
19号住居址（第29図）

発掘区の最も南側に位置する。住居址の半分は発掘区の外に延びる。南北は3.2mの方形を呈する。西のコーナーが調査できないため東西の長さが不明であるが東西の方がかなり長くなると思われる。主軸はほぼ磁北を向く。深さは20cmほどである。カマドは北壁右側によってつくられている。焚口は床を18cmほど掘り下げ，煙道は階段状になっている。周溝は北壁に一部確認できた。貯蔵穴は南東コーナー付近に検出されたが掘り込みが浅い。

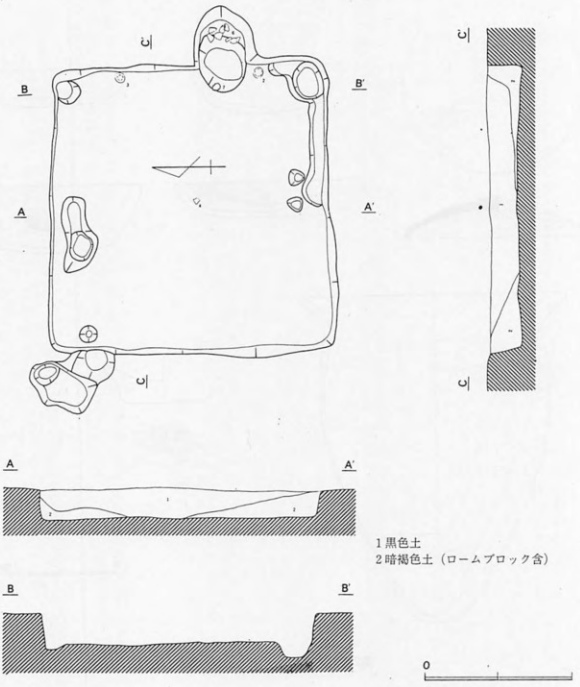
遺物はカマドより，須恵器杯（2），カマド周辺より高台付椀（6）が出土している。



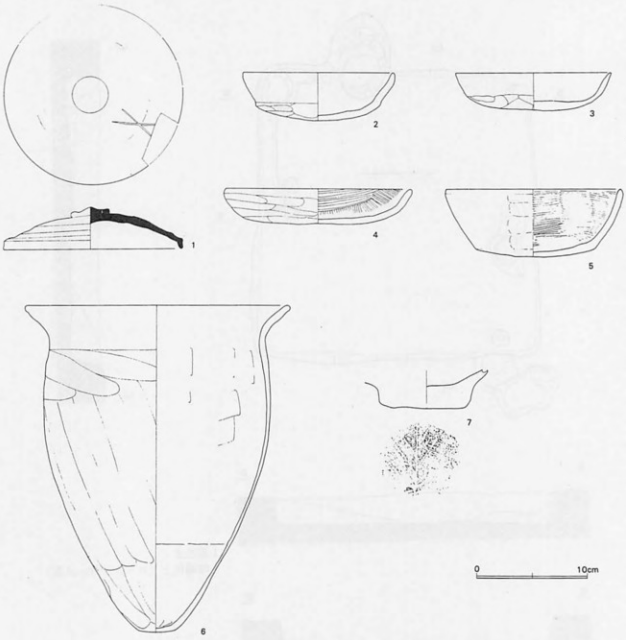
第24図　17号住居址実測図



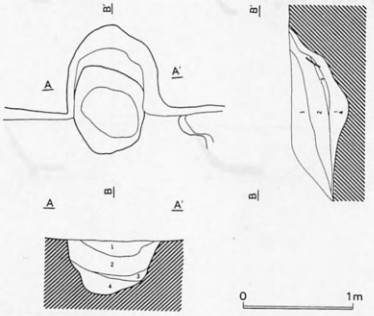
第25図　17号住居址出土土器実測図



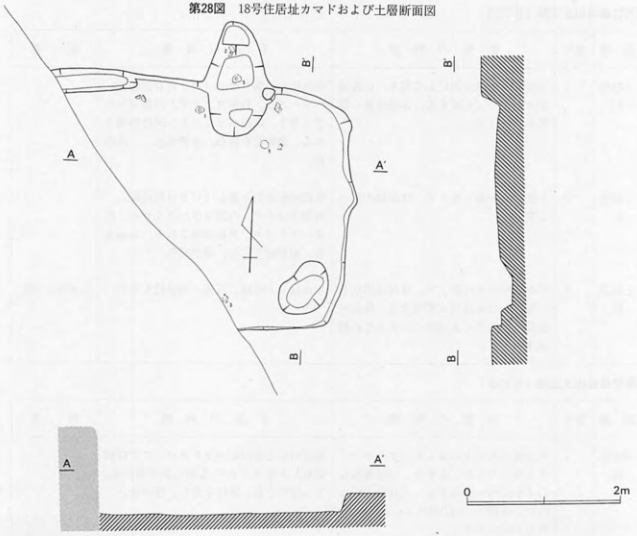
第26図　18号住居址実測図



第27図　18号住居址出土土器実測図



第28図　18号住居址カマドおよび土層断面図



第29図　19号住居址実測図

第30図　19号住居址出土土器実測図

17号住居址出土土器（第25図）

器　種	番号	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
土師器杯	1	平底で、体部は内反して開き、口縁端部でわずかに肥厚する。体部外面に墨書あり（「主」）。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）後、ヘラケズリ。外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。細砂粒を含む。淡黄褐色、一部黒色。	
土師器杯	2	平底（ややあげ底）で、体部は内反して開く。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。3㎜小石、細砂粒を含む。暗赤褐色。	
土師器杯	3	平底（ややあげ底）で、体部は内反して開き、口縁端部で肥厚する。体部外面に墨書あり（欠損部にかかるため判読出来ず）。	手法は2と同様。石英、細砂粒を含む。	口縁部1/3残

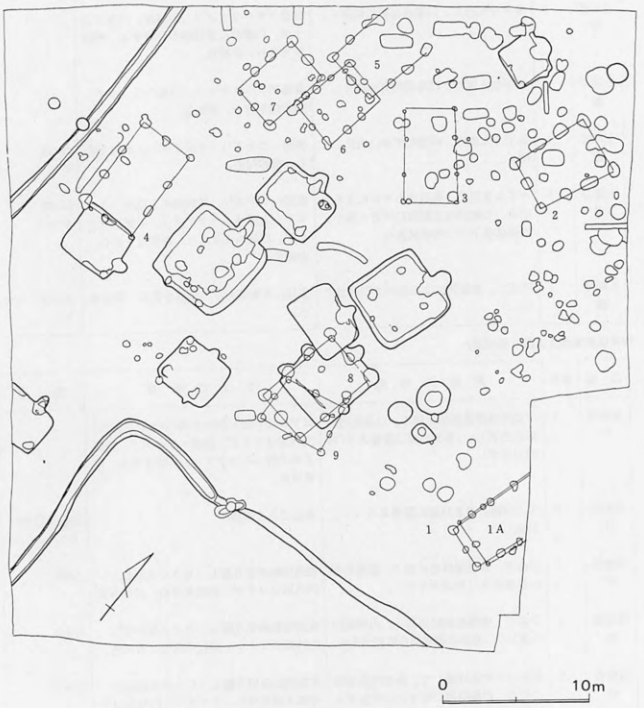
18号住居址出土土器（第27図）

器　種	番号	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	備　考
須恵器蓋	1	中央部にわずかに尖ったつまみがつく下方はなだらかに広がり、口縁端部はわずかに外へ屈曲する。天井部内面は指による押圧で凹凸著しい。器面に焼成前の陰刻がある。	器面外面上部回転ヘラケズリ（ロクロ右回転）。下半ヨコナデ。器面に炭化物付着。6㎜位の小石、砂粒を含む。青灰色。	

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器 杯	2	偏平な丸底で、口縁端部でわずかに内反して開く。口縁部下に稜あり。	体部下半ヘラケズリ。口縁部、内面ヨコナデ。口縁端部に炭化物が付着する。赤色粒子、砂粒を含む。暗赤褐色。	
土師器 杯	3	偏平な丸底で、口縁部直線的に開く。	体部下半ヘラケズリ。口縁部、内面ヨコナデ。口縁部に炭化物が付着する。細砂粒を含む。赤褐色。	
土師器 蓋	4	偏平な丸底で、口縁部外方へ開く。	体部下半ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。細砂粒を含む。赤褐色。	
土師器 椀	5	偏平な丸底で、体部わずかに内反して開く。	器面ヘラケズリ（単位不明）。砂粒を含む。暗赤褐色。	1/2残。 カマド
土師器 甕	6	小さな底部で、体部ゆるやかに立ち上がる。口縁部は直線的に外方へ開く。内面体部下半に接合痕あり。	底部ヘラケズリ、体部斜め方向のヘラケズリ、上部ヨコヘラケズリ。口縁部ヨコナデ。内面ヘラケズリ。細砂粒を含む。赤褐色。	1/4残。 カマド
土師器 甕	7	平底で、側面指による押圧で凹凸目立つ。	底部に木葉痕あり。砂粒を含む。暗赤褐色。	上部欠、カマド

19号住居址出土土器（第30図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
須恵器 杯	1	平底で体部直線的に開く。口縁部内外面凹凸著しい。器面外面に墨書あり（判読できず）。	ロクロ切り離し技法不明（ロクロ右回転）内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ。器面下半手持ちヘラケズリ。砂粒を含む。暗青灰色。	
須恵器 杯	2	1と同様。器面外面に墨書あり（1と同様）。	手法は2と同様。	底部欠、カマド
須恵器 杯	3	平底で、体部直線的に開く。器面外面に墨書あり（判読できず）。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。内外面ヨコナデ。砂粒を含む。暗青灰色	2/3残
須恵器 杯	4	平底で、体部直線的に開く。内外面凹凸著しい。底部に焼成前の陰刻がある。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。内外面ヨコナデ。砂粒を含む。青灰色。	1/2残
須恵器 杯	5	平底（ややあげ底）で、体部内反気味に開き、口縁端部でわずかに外反する口縁端部で器壁薄い。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。体部下端手持ちヘラケズリ。内外面ヨコナデ。5㎜位の石、砂粒多量。	カマド



第31図　建物址位置図

（２）建物址

１，１Ａ号建物址（第32図）

発掘区の最も東に検出された。１号，１Ａ号が重複している。

１号建物址は$P_3-P_4-P_5$を南側梁行，$P_5-P_6-P_7-P_8$を西側桁行とする建物址である。梁行は1.5ｍ等間，桁行はP_3，P_5間が1.8ｍ，P_4，P_7，P_8間が1.5ｍ間である。

２号建物址は$P_{10}-P_{11}-P_{14}$を南側梁行，$P_{12}-P_{13}-P_{14}$を西側桁行とする建物址である。梁行は1.5ｍ等間，桁行はP_{14}，P_{11}間が2.5ｍ等間，P_{10}，P_{11}間が1.9ｍである。

掘形はすべて楕円形を呈し,円形を呈し，１号建物址の方がしっかりしている。深さは25cm－62cmで不揃いである。

２号建物址（第32図）

発掘区中央部の北側に位置する。掘形がいろいろあるがピットが等間隔に並ぶことから建物址とした。

$P_1-P_4-P_{10}$を南側梁行，$P_1-P_2-P_3-P_{10}$を西側桁行とする建物址である。P_4，P_{10}間は3.6ｍ1.8ｍ等間である。$P_1-P_2-P_3-P_4$は5.4ｍで1.8ｍ等間である。

掘形はP_3が円形を呈する他は不整形である。掘り込みは全体的にしっかりしている。２間×３間の建物址である。

３号建物址（第33図）

発掘区南側，11号住居址の南に検出された。梁行は3.5ｍ，桁行はP_1～P_4，6.4ｍ，P_5～P_8，6.3ｍである。P_6だけ柱筋からはずれている。P_1，P_5とP_4，P_7の間がそれぞれ2.5ｍ，2.45ｍとひろく，ほぼかの柱穴の距離は1.9ｍほどである。掘形は大きさ20cm前後の小さな円形や方形を呈する。掘り込みは28～50cmである。

４号建物址（第33図）

発掘区西側，２号溝の東に位置し，18号住居址と重複し，P_1，P_8，P_{10}，は床面を掘り込んでいる。

梁行は北側で3.9ｍ，P_2，P_3，P_7，間が1.9ｍに対し，P_4，P_6，P_9，がそれぞれ2.15ｍ，1.6ｍである。

桁行はP_1～P_4，6.5ｍ，P_7～P_{10}，6.8ｍである。東側は，P_1，P_2の間が2.2ｍ，P_2，P_3の間が2.4ｍ，P_3，P_4の間が1.8ｍである。西側は，P_7，P_8の間が2.2ｍ，P_8，P_9，の間が2ｍ，P_9，P_{10}の間が2.5ｍである。P_2，P_3，P_7，P_8に柱痕が残る。

深さはP_3，P_8が浅いほかは50cm前後でしっかりしている。掘形は円形や楕円形を呈する。

5,6,7号建物址（第34図）

発掘区の西側ピット群のうち，ピットが規則的に並ぶものを建物址した。

５号建物址はP_1～P_8をあてた。梁行は3.8ｍで，$P_4-P_6-P_7$間はそれぞれ２ｍ，1.8ｍである。東側梁行$P_1-P_2-P_3-P_4$間はそれぞれ２ｍ，1.5ｍ，２ｍである。掘り込みは全体的にしっかしている。P_4とP_8に柱痕がある。現状で２間×３間の建物址である。

６号建物址は５号建物址の南側に位置し，５号建物址と重複する。北側梁行のピットを欠く。柱穴はP_9～P_{17}をあてた。南梁行は$P_{13}-P_{13}-P_{17}$で1.7ｍ等間である。P_{12}がわずかに柱筋からはなれる。西側の桁行は4.7ｍで$P_{14}-P_{15}-P_{16}-P_{17}$間は1.7ｍ，1.4ｍ，1.7ｍである。東側は$P_9-P_{10}-$

P_{11}間，1.4m，1.7mである。掘形はすべて円形で，P_9は柱痕がある。

7号建物址は6号建物址の西側に位置し，東側のピット6号建物址と重複する。北側の桁行はP_{34}－P_{32}－P_{18}で1.7m等間である。南側はP_{21}－P_{23}－P_{37}で1.7m，1.5mである。桁行は東側P_{18}－P_{19}－P_{30}－P_{31}，西側P_{24}－P_{25}－P_{26}－P_{27}で柱間は1.7m，1.3m，1.7mである。掘形はP_{22}が方形のほかはすべて円形でしっかりしてる。P_{26}より土師器杯が検出された。

8，9号建物址（第35図）

発掘区の中央部に検出された。8号建物址は15，16号住居址と重複し，9号建物址は15号住居址と重複する。

8号建物址は15号住居址とほぼ同じ方角を向いている。梁行は4m，P_4－P_5－P_9間は2m等間である。西側梁行は，P_6－P_7－P_8－P_9で2m，1.7m，2.3mである。東側はP_1－P_2－P_3－P_4で2.2m，1.7m，2.3mである。掘形はすべて円形で90cmと深いピットもある。全体的にしっかりしている。

9号建物址は梁行3.3m，桁行北側4.4m，南側4.6mの建物である。梁行P_{10}－P_{11}－P_{12}間1.9m，1.4m P_{15} -P_{16} -P_{17} 間1.4m，1.9mである。梁行はP_{10}－P_{13}－P_{15}間2.2m等間，P_{12}－P_{14}－P_{17}間2.5m，2.1mである。P_{14}が柱筋からはずれている。掘形はすべて円形を呈する。

建物址出土土器（第36図）

1は2号建物址P_8より検出された。平底（あげ底）で体部内反して立ち上がる。底部は回転糸切り離し（ロクロ左回転）される。内面細かいヘラミガキ，黒色処理される。暗赤褐色を呈し，3mm位の小石，砂粒を含む。1/2残。2は7号建物址P_{36}より検出された。平底（あげ底）で体部内反して立ち上がり，端部でわずかに外反する。器面凹凸目立つ。底部，および外面に墨書有り(「三」)。底部は回転糸切り離し（ロクロ右回転）される。内面細かいヘラミガキ，黒色処理される。暗赤褐色を呈し，砂粒を含む。1/2残。

1，1A号建物址

No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考	No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考
1	50×45	44		8	70×60	54	
2	61×50	42		9	65×40	49	
3	58×50	61		10	40×34	62	
4	50×43	33		11	50×48	31	
5	65×50	52		12	65×50	46	
6	45×45	42		13	37×30	61	
7	56×56	30		14	36×35	25	

2号建物址

No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考	No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考
1	100×80	68		6	75×63	81	
2	125×75	51		7	105×85	83	
3	80×75	57		8	100×86	59	
4	80×75	53		9	125×65	38	
5	160×100	80		10	80×65	73	

3号建物址

No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考	No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考
1	28×28	34		5	20×18	50	
2	35×30	35		6	21×20	50	
3	24×20	28		7	25×22	41	
4	22×20	41		8	22×22	31	

4号建物址

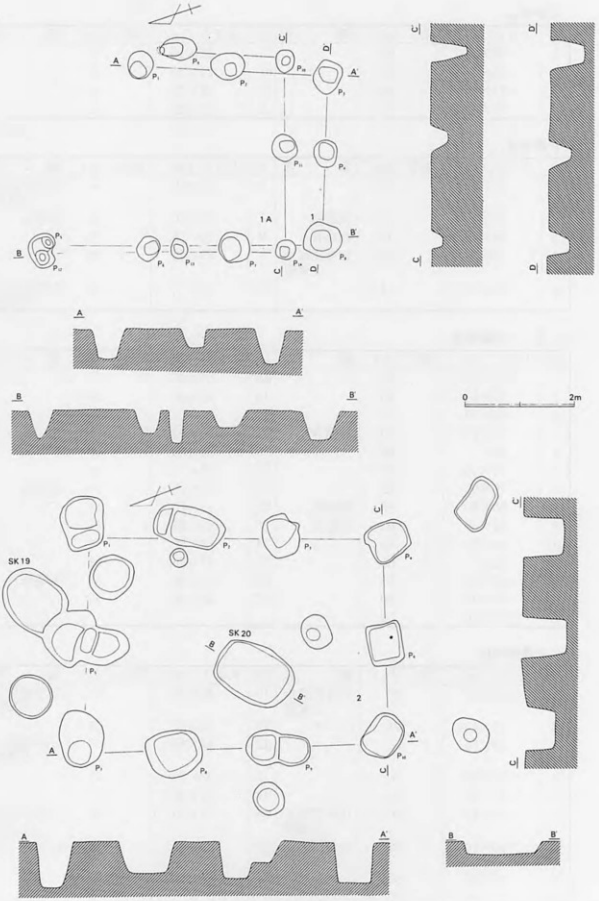
No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考	No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考
1	57×56	63		6	30×40	61	18号住居址と重複
2	60×50	40	柱痕有	7	70×70	48	柱痕有
3	76×48	32	柱痕有	8	70×54	60	
4	40×33	53	18号住居址と重複	9	70×55	60	
5	65×70	18		10	65×	41	8号住居址と重複

5，6，7号建物址

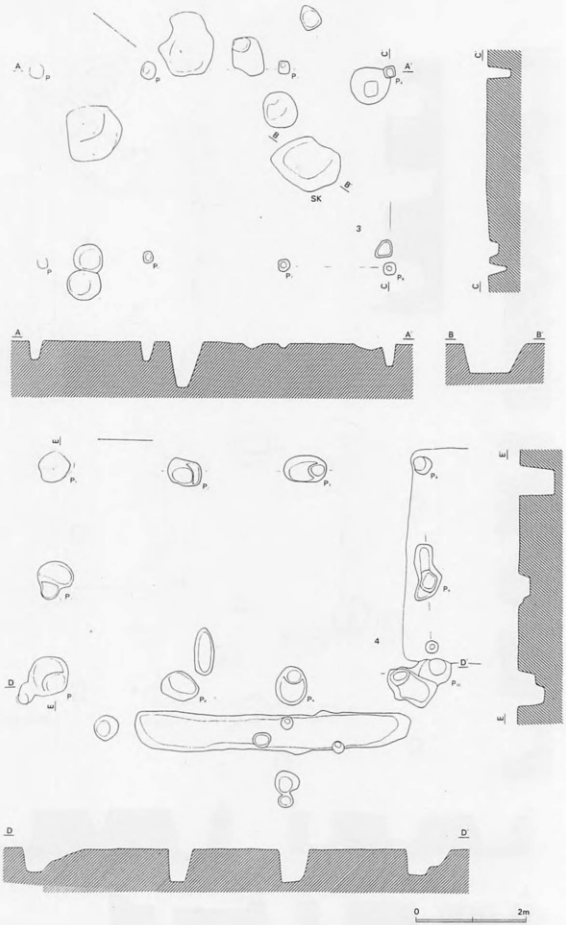
No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考	No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考
1	88×55	60		15	57×46	67	
2	70×55	65		16	55×52	38	
3	66×50	57		17	77×	76	
4	70×70	60	柱痕有	18	70×55	55	
5	60×	68		19	52×50	60	
6	70×55	84		20	66×	66	
7	70×60	70		21	75×75	54	柱痕有
8	85×60	45	柱痕有	22	85×75	44	
9	62×60	62	柱痕有	23	60×55	45	
10	62×55	55		24	83×80	58	
11	55×	65		25	75×56	68	
12	45×45	53		26	64×64	62	柱痕有
13	47×36	40		27	35×24	50	
14	70×46	56					

8，9号建物址

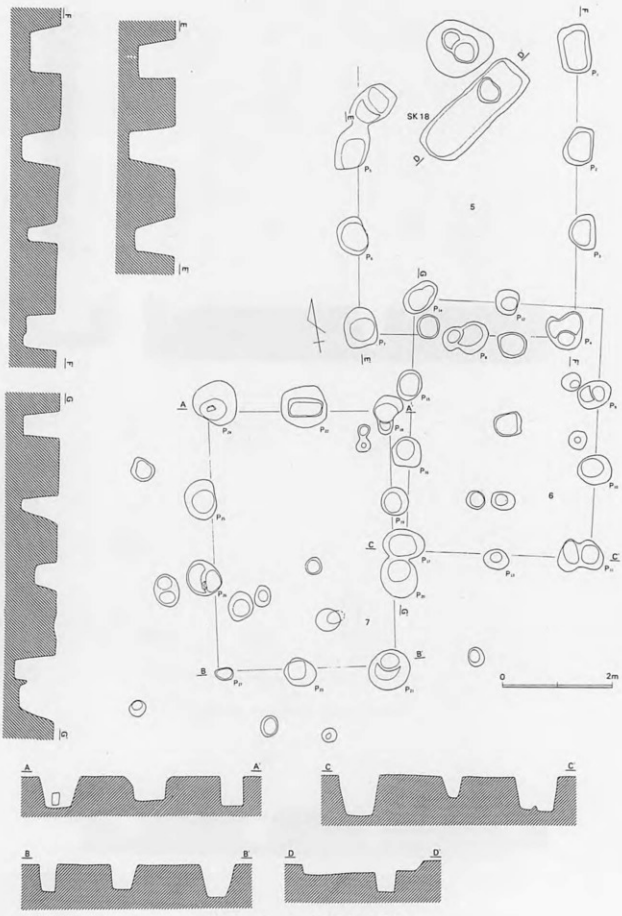
No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考	No	大きさ（cm）	深さ（cm）	備　考
1	110×95	90	15号住居址と重複	10	65×60	64	15号住居址と重複
2	45×43	92	〃	11	45×37	34	
3	65×65	65	〃	12	47×45	52	15号住居址と重複
4	85×65	70		13	66×52	72	
5	85×85	55		14	65×40	73	
6	50×40	(90)	16号住居址と重複	15	50×45	88	15号住居址と重複
7	90×70	62	15号住居址と重複	16	48×45	35	
8	85×80	80	〃	17	64×60	65	
9	85×80	70					



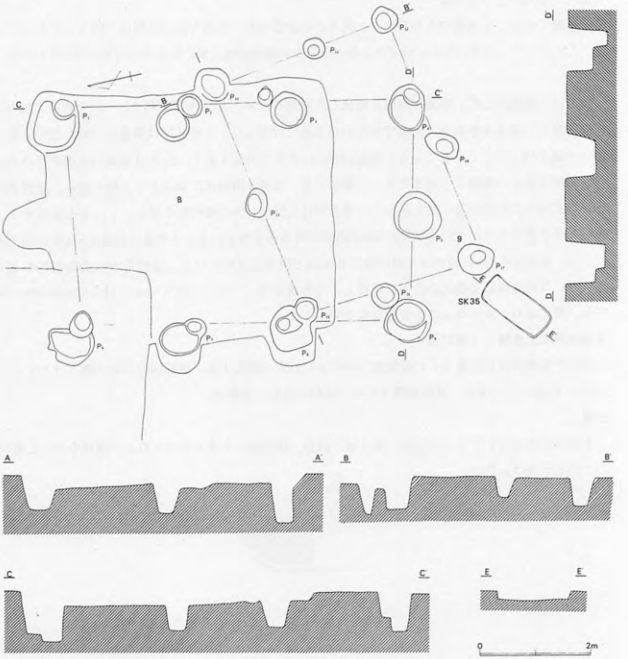
第32図　1，1A,2号建物址実測図



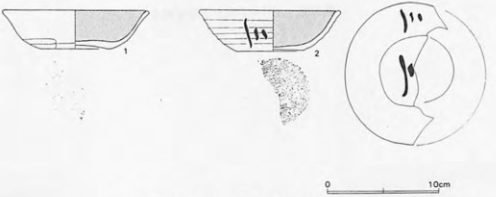
第33図　3，4号建物址実測図



第34図　5，6，7号建物址実測図



第35図　8，9号建物址実測図



第36図　2，7号建物址出土土器実測図

（3）井戸，土壙

本遺跡で検出した遺構のうち井戸など明らかに性格のわかる落ち込み以外は土壙としてあつかった。したがって，土壙のなかにはプランのわからない建物の柱穴などを含んでいるものと思われる。

井戸

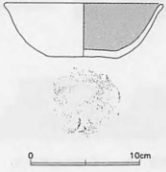
井戸は5基検出した。調査が梅雨を前後した時期のため，地下水位が高く，1.5ｍほど掘り下げると厳しい湧き水があり，完掘できたのは2基だけだった。1号井戸は調査区の最も北に位置し1号土壙を切ってつくられている。掘形は径 1.3ｍの円形を呈す。2，3，4号井戸は調査区の中央部，12号住居址の東側に3基まとまって検出した。2号井戸は径2.3mほどで土壙を切る。確認面下1ｍほどのところから急に落ち込む。3号井戸は2.25×1.5mの楕円形を呈し，ピットと重複する。中段に平な面があり，その下は径0.55mで円形に掘り込まれている。4号井戸は径1.5ｍ程の円形を呈する。底部は0.4×0.55ｍほど楕円径に50cmほど掘り込まれている。底付近から土師器杯が検出された。5号井戸は発掘区の西側に位置し，2号溝を切ってつくられている。径0.75mの円形を呈する。覆土はロームブロックを含む黒色土である。

4号井戸出土遺物　（第37図）

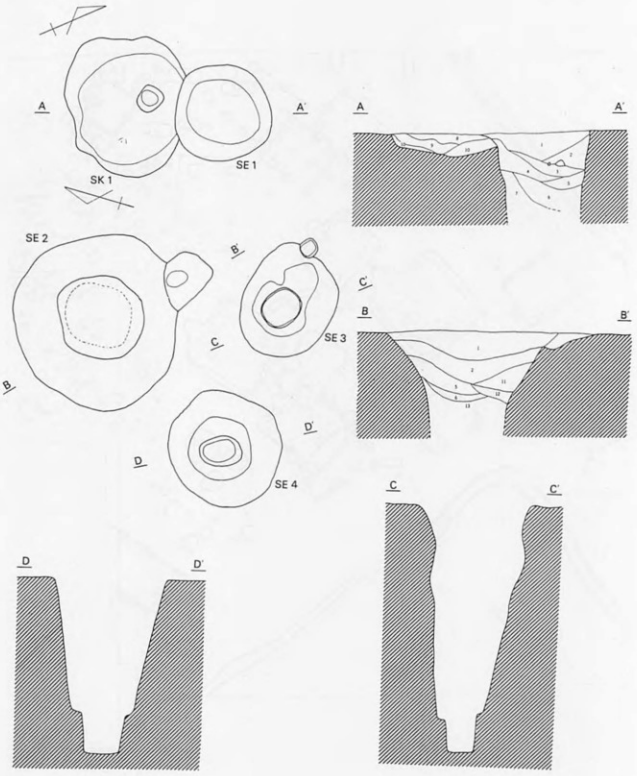
平底で体部内反して開き，口縁端部でわずかに外方へ屈曲する。底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。内面ヘラミガキ，黒色処理される。砂粒を含む。赤褐色。

土壙

土壙の形態はさまざまであるが，長方形，円形，楕円形に大きく分けられる。遺物を出土し時期のわかる土壙は少ない。

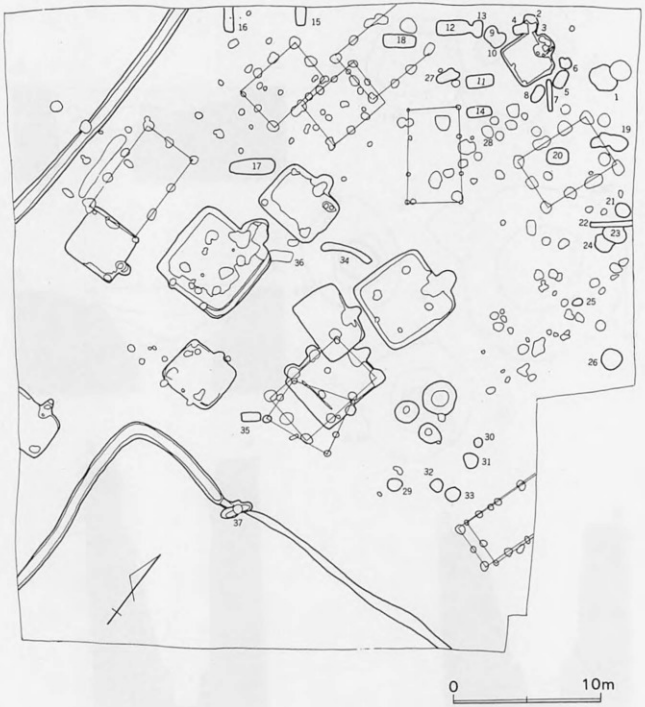


第37図　4号井戸出土土器実測図

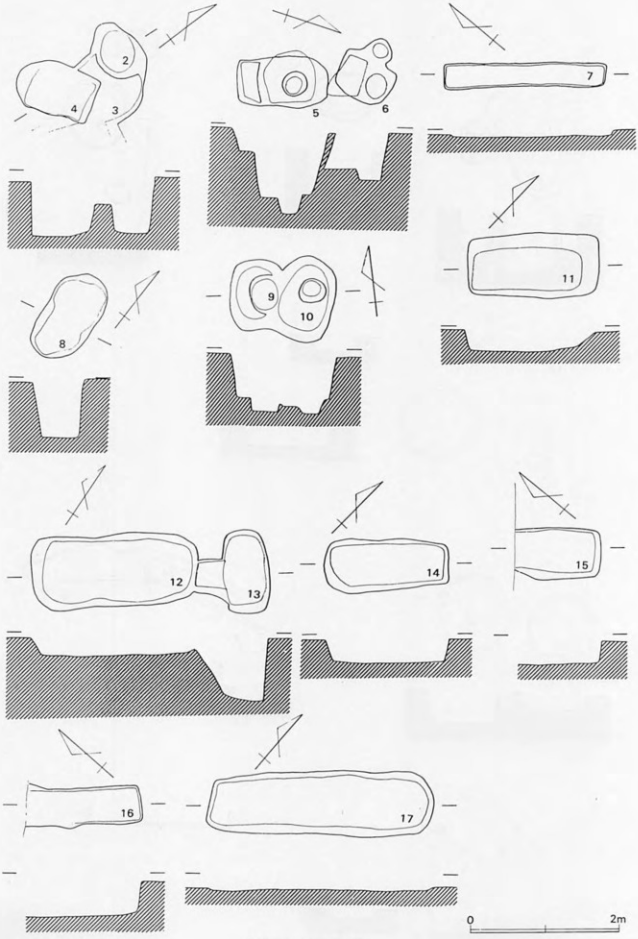


1 黒土（ローム粒子含）
2 〃
3 〃
4 黒褐色土
5 褐色土（ロームブロック多量）
6 黒褐色土
7 〃
8 暗褐色土（焼土，炭化材含）
9 〃
10 褐色土
11 黒褐色土
12 褐色土
13 黒褐色土（ロームブロック）

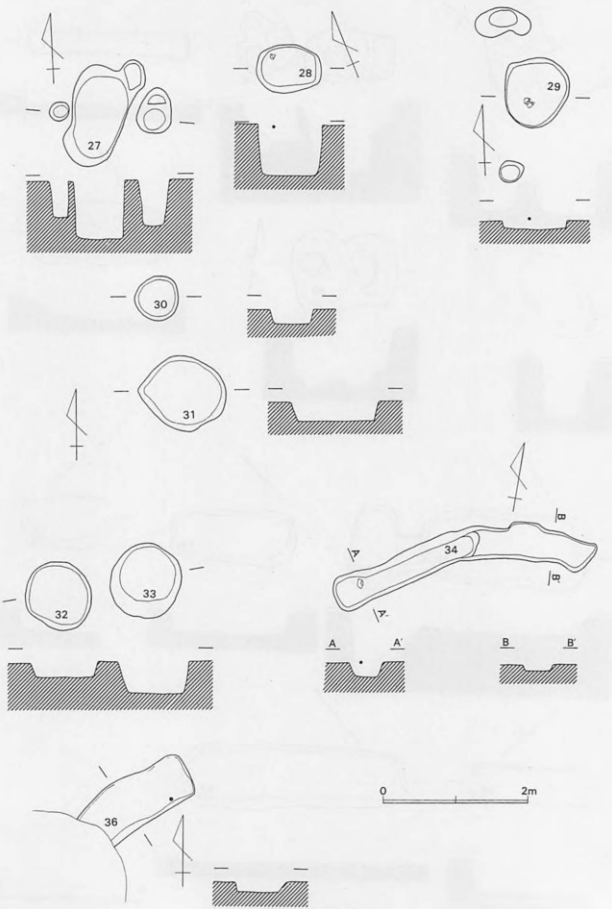
第38図 1，2，3，4号井戸実測図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
10m

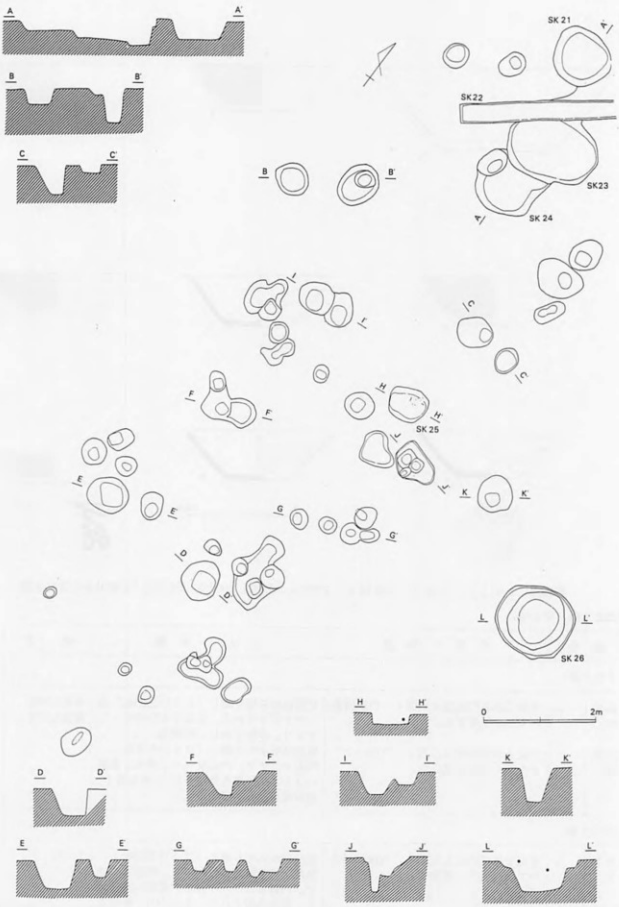
第39図　土壙位置図



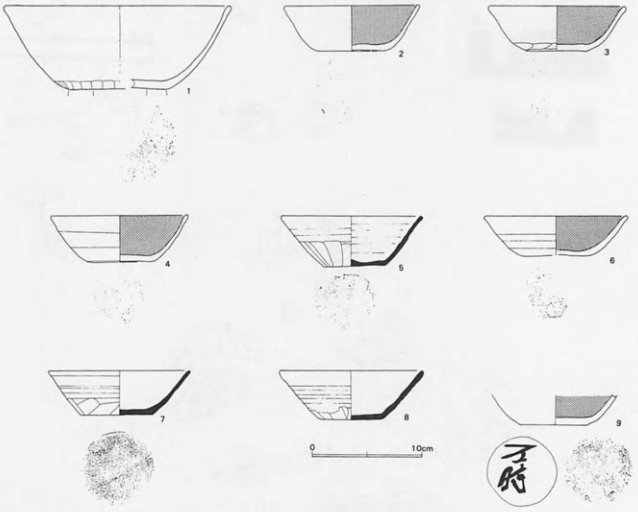
第40図　土壙実測図(1)



第41図　土壙実測図(2)



第42図　土壙実測図(3)



第43図　1号(1,2)，25号(3)，26号(4,5)，28号(6)，29号(7)，34号(8)，36号(9)，土壙出土土器実測図

土壙出土土器（第43図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
1号土壙				
土師器杯	1	平底で体部内反気味に開く。口縁端部わずかに肥厚する。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）後ヘラケズリされる。体部下半狩持ちヘラケズリ。砂粒を含む。赤褐色。	体部1/6残 底部1/2残
土師器杯	2	平底で体部直線的に開く。内面ヘラミガキにより凹凸目立つ。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。外面ヨコナデ。内面横ヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。赤色粒子、細砂粒を含む。暗赤褐色。	
25号土壙				
土師器杯	3	平底で体部内反して開き、口縁端部でわずかに外方へ屈曲する。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。体部下半手持ちヘラケズリ、外面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。5㎜小石、砂粒を含む。淡黄褐色。	1/2残

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
26号土壙				
土師器杯	4	平底で体部内反して開き、口縁端部で肥厚する。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）後ヘラケズリされる。器面ヨコナデ。内面ヨコヘラケズリ、底部ヘラミガキ、黒色処理される。石英、細砂粒を含む。淡黄褐色。	
須恵器杯	5	平底で体部直線的に開く。器面内外面ヨコナデにより凹凸目立つ。器壁薄い	ロクロ切り離し技法不明（ロクロ右回転底部、器面下半ヘラケズリ。内外面ヨコナデ。細砂粒を含む。暗青灰色。	口縁部一部欠
28号土壙				
土師器杯	6	平底で体部内反気味に開き、口縁端部でわずかに外方へ屈曲する。	手法は2と同様。石英、細砂粒を含む。赤褐色。	1/4残
29号土壙				
須恵器杯	7	5と同様。	手法は5と同様。2㎜小石、細砂粒を含む。	口縁部1/2欠
34号土壙				
須恵器杯	8	平底で体部直線的に開く。器面凹凸目立つ。	底部ヘラケズリ（切り離し技法不明）。体部下半手持ちヘラケズリ。器面内外面ヨコナデ。5㎜小石、石英、細砂粒を含む。	1/2残
36号土壙				
土師器	9	平底で体部内反して開く。底部外面に墨書あり（「万」）。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）。器面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラカガミ、黒色処理される。細砂粒を含む。暗赤褐色。	口縁部欠

（4）溝

2号溝（第44図）

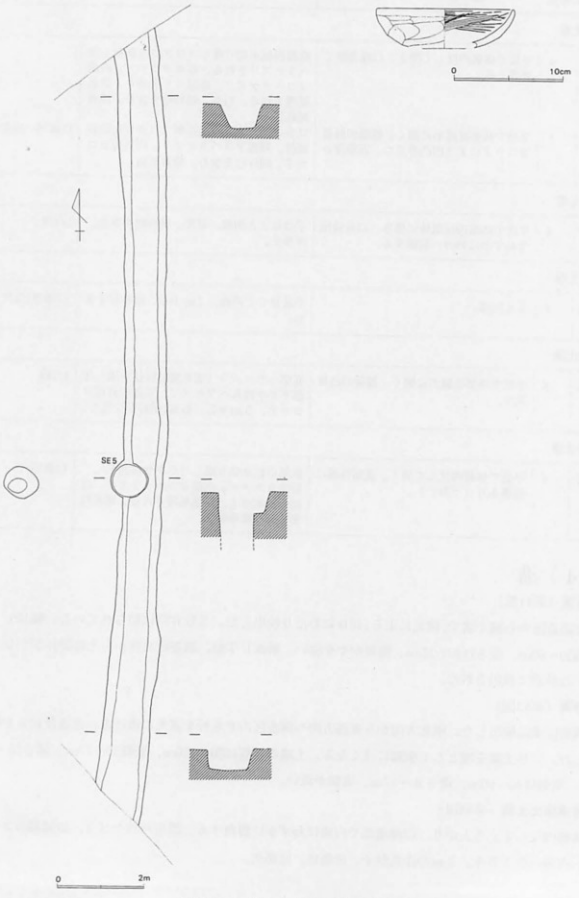
1次調査区から続く溝で，南北に走る。18ｍにわたり検出した。5号井戸に切られている。幅100底幅50～60cm，深さは40～55cm。南側がやや深い。断面U字形。調査区北側から土師器杯がかなり浮いた状態で検出された。

3号溝（第45図）

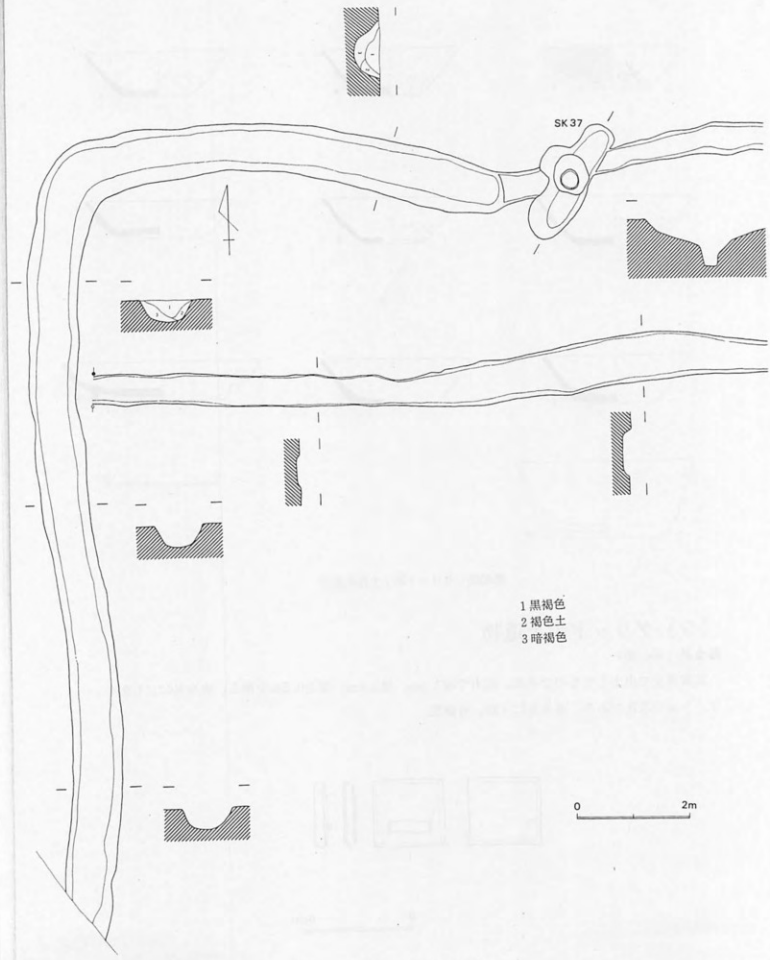
調査区南に検出した。南北方向から東西方向へ調査区内で走行を直角に曲げる。総延長40ｍを検出した。37号土壙を境として極端に浅くなる。土壙の西側は80～110cm，底幅50～70cm，深さ33～50cm。東側は40～90cm，深さ8～17cm。南側が深い。

2号溝出土土器（第44図）

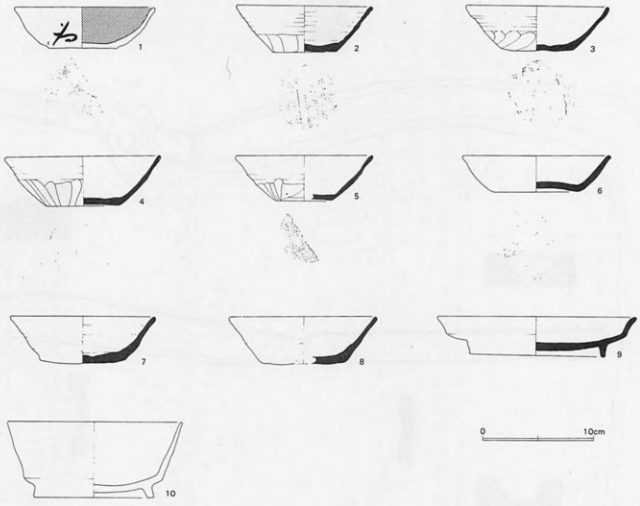
体部内反して立ち上がり，口縁端部で内側にわずかに屈曲する。器面ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ。内面ヘラミガキ。2㎜の赤色粒子。赤褐色。底部欠。



第44図　2号溝，および出土土器実測図



第45図　3号溝実測図

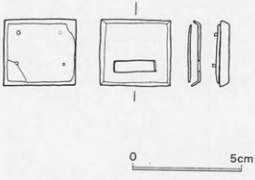


第46図　グリッド出土土器実測図

（5）グリッド出土遺物

帯金具（第47図）

試掘調査で出土してものである。巡方で縦3.1cm，横3.3cm，厚さ0.5cmを測る。表金具には1.9×0．5cmの透孔がある。裏金具に4鋲。青銅製。



第47図　グリッド出土帯金具実測図

グリッド出土土器（第46図）

器種	番号	形態の特徴	手法の特徴	備考
土師器杯	1	平底で体部内反して開き、口縁端部でわずかに外方へ屈曲する。器面外面に墨書あり（「為」）。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。器面ヨコナデ。内面ヨコヘラミガキ、底部ヘラミガキ。細砂粒を含む。淡黄褐色。	1/2残
須恵器杯	2	平底（あげ底）で体部直線的に開く。器面ヨコナデにより凹凸目立つ。	ロクロ切り離し技法不明（ロクロ左回転底部、器面下半ヘラケズリ。内外面ヨコナデ。砂粒を含む。青灰色。	3/4残
須恵器杯	3	平底で体部内反気味に立ち上がり、口縁端部で内側へ屈曲する。器面内外面とも凹凸目立つ。	ロクロ切り離し技法不明（ロクロ右回転）底部、体部下半ヘラケズリ。内外面ヨコナデ。緋色粒子、細砂粒を含む。灰白色。	3/4残
須恵器杯	4	2と同様。	手法は3と同様。細砂粒を含む。灰白色。	口縁部1/4残
須恵器杯	5	2と同様。	手法は3と同様。砂粒を多量に含む。灰白色。	口縁部3/4残
須恵器杯	6	平底（あげ底）で体部内反気味に短く開き、口縁端部で外方へ屈曲する。	底部回転糸切り離し（ロクロ右回転）。器面内外面ヨコナデ。3㎜小石、砂粒を含む。灰白色。	口縁部1/6残
須恵器杯	7	平底で体部直線的に開く。内面底部凹凸目立つ。	手法は6と同様。3㎜の小石、砂粒多量暗青灰色。	
須恵器杯	8	7と同様。	底部回転糸切り離し（ロクロ左回転）器面内外面ヨコナデ。5㎜小石、砂粒を含む。暗青灰色。	口縁部1/4残
須恵器高台付盤	9	高台を付し、口縁部は短く外反して開く。	底部回転ヘラケズリ、高台部および器面ヨコナデ。3㎜小石、砂粒を含む。暗青灰色。	2/3残
高台付椀	10	高台を付し、口縁部は直線的に開く。	手法は9と同様。細砂粒を含む。内面灰白色、器面黒色。	

Ⅴ まとめ

2次調査において検出した遺構は住居址9，建物址9，溝2，土壙等であった。住居址は1軒を除きすべて完掘することができた。発掘したすべての住居址にカマドが構築されていた。18号住居址の東にカマドが付設されているが，ほかの住居址はすべて北壁にやや東によって構築されている。15,16号住居址が切り合い関係にある。住居址形態は方形，長方形があり，全体的には整然とした形態のものが多い。

出土遺物からみた本遺跡の年代的位置について若干の検討を加えることにする。栃木県南部の奈良・平安時代に編年的研究は，近年集落遺跡の調査が進み，その出土遺物の分析から考察が加えられている。特に薬師寺南遺跡の調査では，Ⅰ期からⅤ期まで，土師器杯を軸として，8世紀前半から9世紀後半代に年代編成を提起している(註1)。小山市内の遺跡調査では，北浦遺跡において甕形土器の形態変化を中心に9世紀代の編年作業が行なわれている(註2)。

当遺跡では住居の出土遺物からⅠ～Ⅳ期に区分する。

Ⅰ期

13.18号住居址が該当する。器種は土師器杯，盤，椀，甕，須恵器盤，高台付盤がある。

須恵器

蓋，盤が検出されているにすぎない。盤は断面台形の長めの高台が付されている。底の調整は不明である。蓋は上面を回転ヘラケズリされ，口唇部がつまみだされ偏平なつまみが付く。

土師器

土師器はいずれもロクロ未使用で，杯が18-2のように口縁部下に稜をもつものと，18-3のように端部が尖るものがある。盤，椀いずれも内面ヘラミガキされている。

甕はいわゆる「武蔵形甕」で，最大径を口縁部にもち胴部上部を横ヘラケズリ，下半が斜め方向のヘラケズリがされる。

Ⅱ期

12.16号住居址が該当する。12号住居址から土師器が検出されなかった。器種は須恵器蓋，杯,高台付椀，土師器盤がある。

須恵器

須恵器杯のロクロからの切り離し技法は回転糸切り，回転ヘラ切り離し，の二つの技法が認められる。いずれも底径がおおきく器壁が厚い。蓋はⅠ期と同様である。高台付椀は2点出土している。体部や直線的に立ちあがり，断面台形の高台がつく。

土師器

盤が1点だけ出土している。口縁部が尖り，内面ヘラミガキされる。台付甕は体部がヘラケズリされている。

Ⅲ期

14,19号住居址が該当する。器種は須恵器杯，高台付椀，土師器杯，甕がある。形状，技法的に須恵器であるが，酸化炎焼成の鉢がある。土師器は19号住居址からは検出されなかった。

須恵器

須恵器の切り離し技法は回転糸切り，回転ヘラケズリの二つの技法がみられ，切り離し後の再調整は19-5に限ってみられる。14-1～6，19-1，2のように底部をヘラケズリ，また，体部下半を手持ちヘラケズリする杯が現われる。杯は底径が小さく，器壁が薄い。高台付椀は回転糸切りされ，ロクロ痕がよく残る。

土師器

土師器杯は回転糸切りが主体であるが，14-9に糸切り後ヘラケズリをした杯がみられる。いずれも内面黒色処理されている。甕は完形のものはなく，口縁部の断面が「コ」の字状を呈するものが2点出土している。

Ⅳ期

11，15，17号住居址が該当する。須恵器が少なくなり，皿類が出現する。器種は須恵器が高台付皿，土師器は杯，皿がある。11住と15住は「万時」という墨書を有する土器を共通して伴う。酸化炎焼成の杯，壺，甕がある。15号住からまとまって出土した土師質の杯については住居址に帰属するか問題があるので一応除外しておく。

須恵器

高台を付した皿15-25がある。口縁部が短く立ち，底部は回転ヘラケズリされる。

土師器

杯は回転糸切りで内面黒色処理される。糸切り後，底部をヘラケズリする17-1が1点ある。また，わずかに体部底部付近をヘラケズリする15-17，20，21がある。皿は内面黒色処理しているものとないものがある。

以上，出土土器から一応Ⅰ～Ⅳ期に編年を試みた。Ⅰ期は真間期にあたり，Ⅱ～Ⅳ期が国分期に相当する。Ⅳ期の高台付皿はその系譜が9世紀初頭に出現した緑釉，灰釉陶器に求められ（註3），また，皿は埼玉県新久A-2窯で出現するといわれている（註4）。新久A-2窯は国分寺の再建瓦を併焼きしていることから9世紀中葉に位置づけられる。Ⅳ期を9世紀後半以降とすることができる。また，黒色土器の普及を9世紀とすると，Ⅱ期は8世紀後半～9世紀初頭，Ⅲ期は9世紀中葉，Ⅳ期は前述のとおり9世紀後半以降となる。

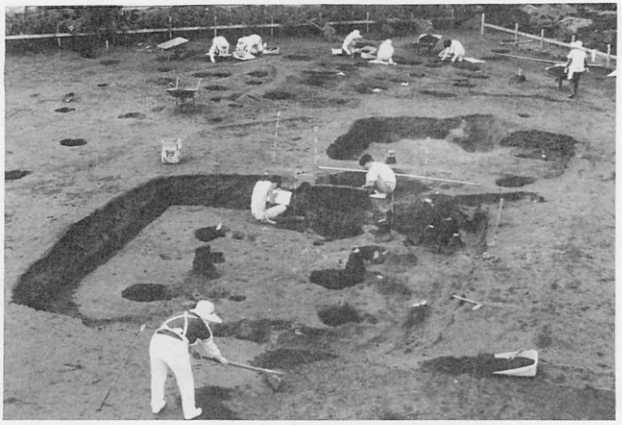
註1　三沢正善，他『乙女不動原北浦遺跡』（小山市文化財報告書11集）小山市教育委員会　昭和57年

註2　橋本澄朗，川原由典他『薬師寺南遺跡』栃木県教育委員会　昭和56年

註3　西弘海　『土器様式の成立とその背景』小林行雄古稀記念論文集「考古学論考」昭和57年

註4　坂詰秀一　『武蔵新久窯跡』　昭和46年

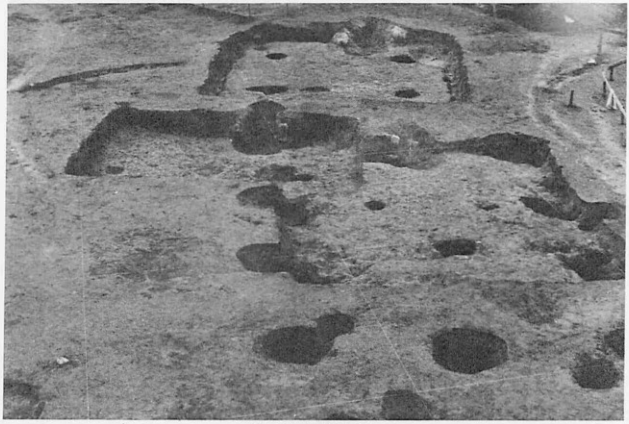
図　　版



作 業 風 景

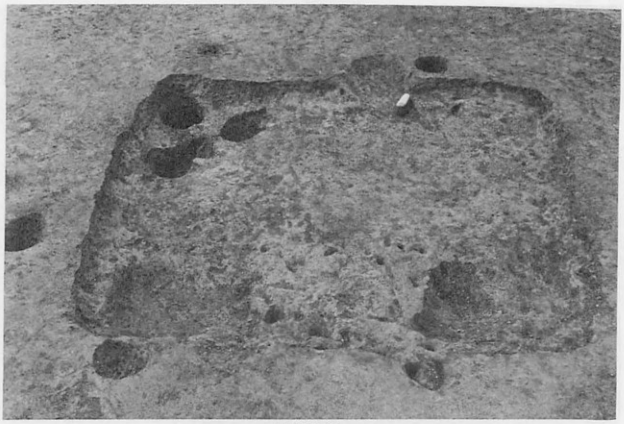
13，14号住居址

図　版　2

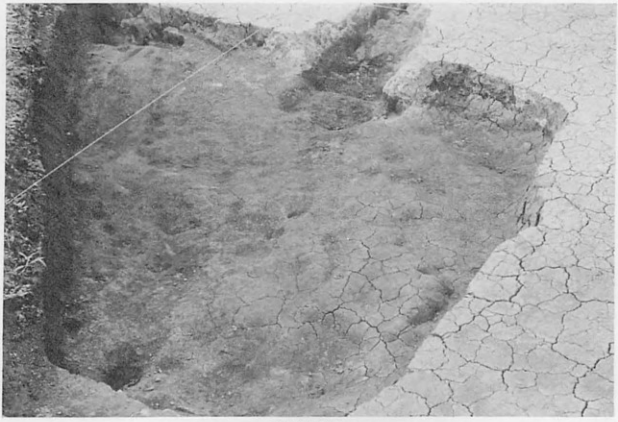


12，15，16号住居址

15号住居址遺物出土状態



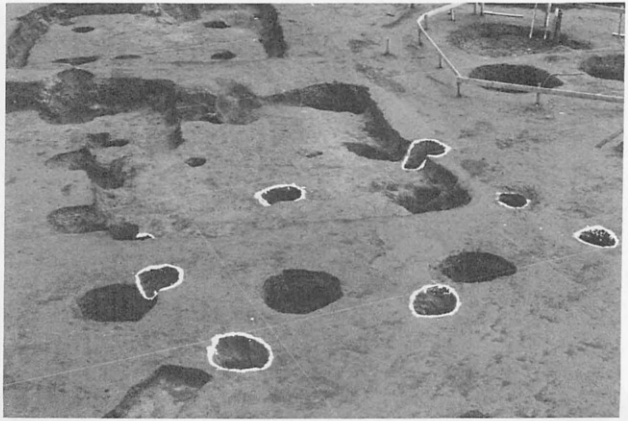
17号住居址



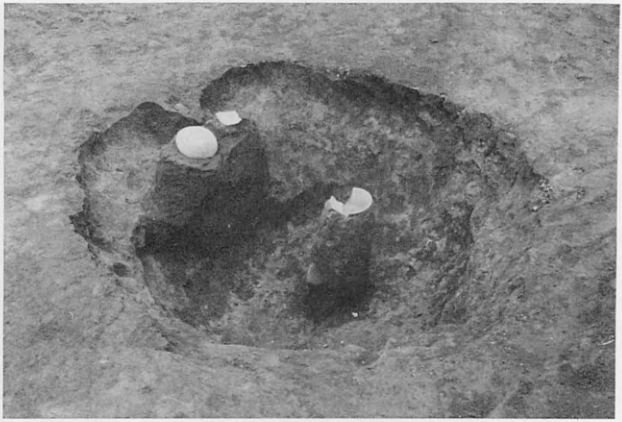
19号住居址

図　版　4

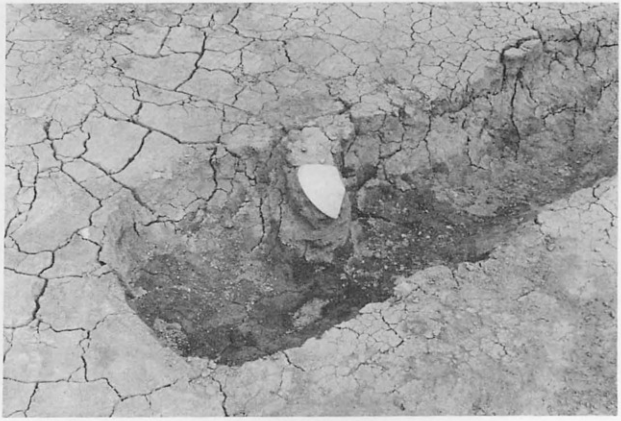
4号建物址



8，9号建物址

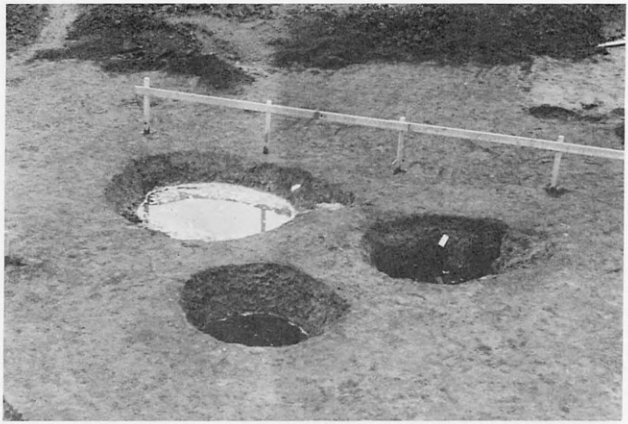


26号土壙遺物出土状態

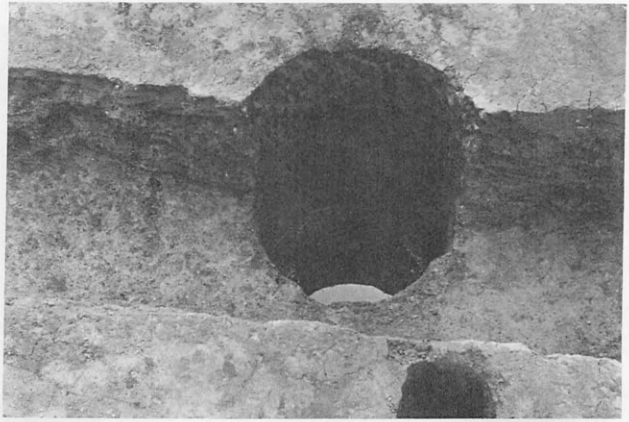


34号土壙遺物出土状態

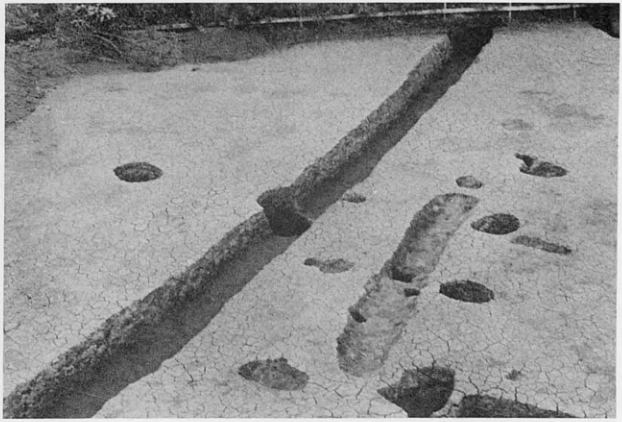
図　版　6



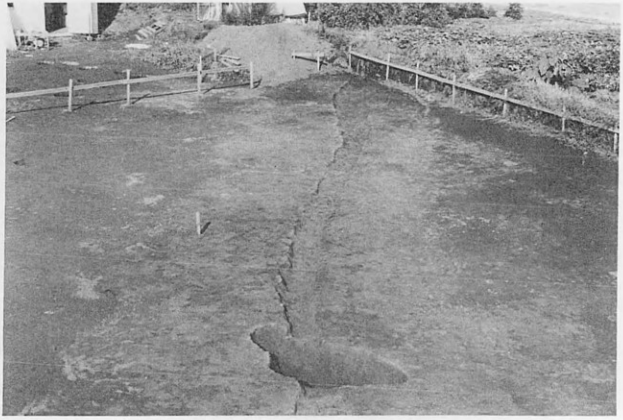
2，3，4号井戸



5号井戸，2号溝

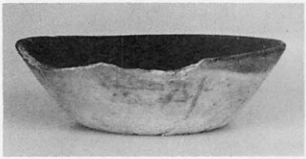


2号溝



3号溝

図　版　8

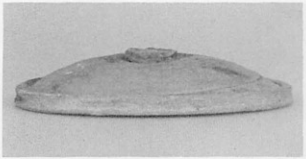


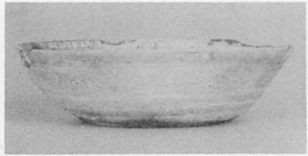
11－4

11－5

11－8

11－10

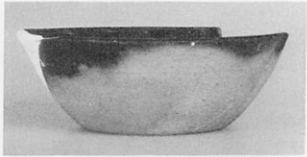




12－2

12－11

14－6



14－14

15－1

15－2

15－4

15－5

15－6

15－7

15－8

15－14

15－24

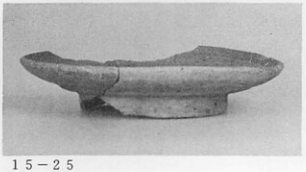
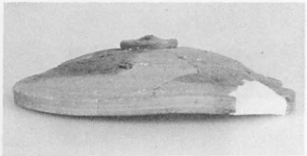

15－25

図　版　10

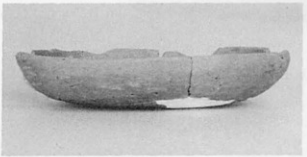
16－10



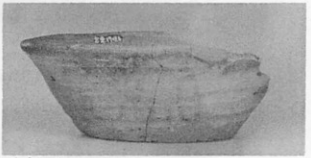
18－1

18－2

18－3



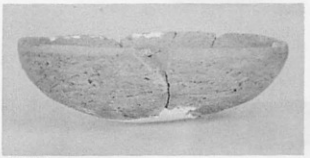
18－4



19－1

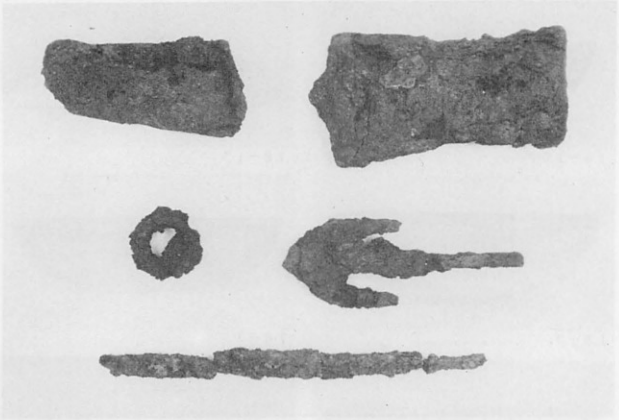
19－2

19－6

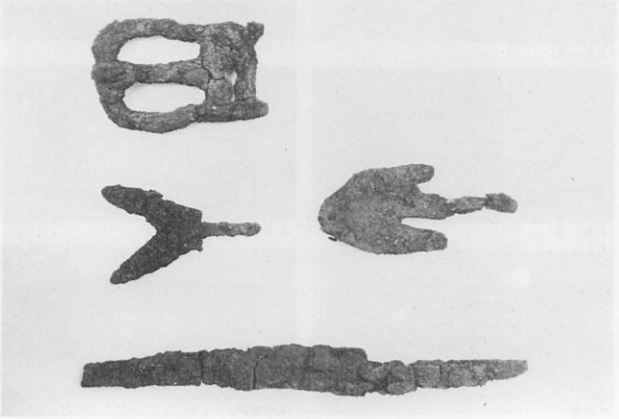


2号溝

4号井戸

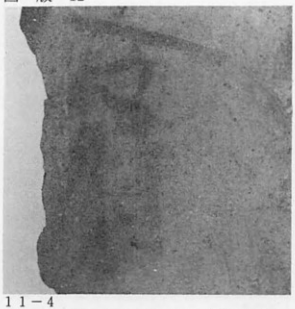


１２号住居址出土鉄器

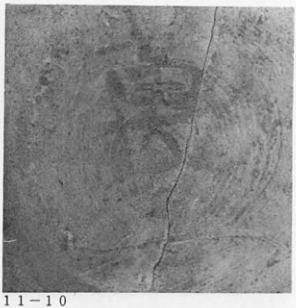


１４号住居址出土鉄器

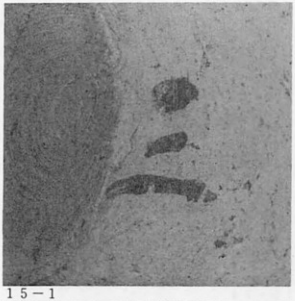
図　版　12



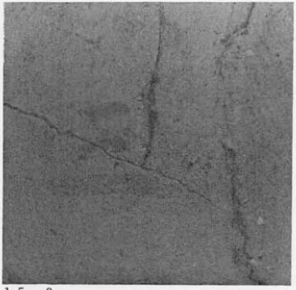
11－4



11－10



15－1

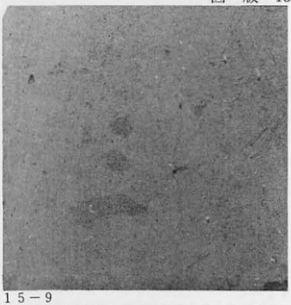


15－3

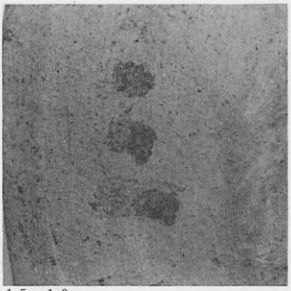
15－6

15－7

15－8



15－9



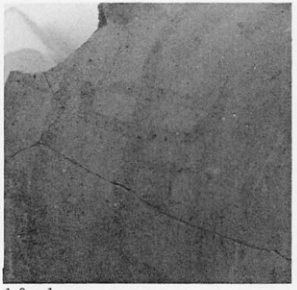
15－10

15－14

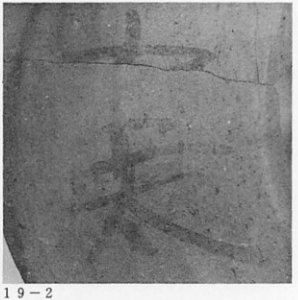
15－15

15－19

図　版　14



19－1



19－2

7号建物址

35号土壙

グリッド出土帯金具

栃木県小山市文化財調査報告書第20集
宮内東遺跡発掘調査報告書
——第２次調査——

昭和62年３月20日印刷
昭和62年３月30日発行
発行　栃木県小山市教育委員会
印刷　日栄印刷（有）